



文部科学省指定研究開発学校 高等学校 地理歴史科  
「地理基礎」 「歴史基礎」 実施報告書 Vol.1

(Citation)

文部科学省指定研究開発学校 高等学校 地理歴史科 「地理基礎」 「歴史基礎」 実施報告書, 1:1-51

(Issue Date)

2014-02

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81012699>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012699>



平成25～28年度 文部科学省指定研究開発学校

高等学校 地理歴史科

**「地理基礎」**

**「歴史基礎」**

実施報告書 (vol. 1)

神戸大学附属中等教育学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第 108 条第 1 項において準用する第 55 条及び第 108 条第 2 項において準用する第 85 条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容の全てが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものではないことにご留意してお読みください。

## 例 言

- 1 本報告書は神戸大学附属中等教育学校が、平成 25 年度から平成 28 年度まで文部科学省に委託を受け実施した研究開発の 1 年次の成果をまとめたものである。
- 2 本書の編集は、高木 優が担当した。執筆については、副校長勝山 元照、および地理歴史科教員（高木 優、水嶋 正稔、上村 幸、石川 照子、東 宏美、小林 理修、森田 育志、上島 智史）が担当した。
- 3 平成 25 年度の研究開発では、下記の運営指導委員の方々に助言と指導をいただいた（役職・所属などは当時）。

平成 25 年度 高橋 昌明 （神戸大学名誉教授）  
中山 修一 （広島大学名誉教授）  
和田 文雄 （広島 E S D ・ユネスコスクール研究会代表）  
杉本 良男 （国立民族学博物館民族文化研究部教授）  
梅津 正美 （鳴門教育大学副学長）  
吉水 裕也 （兵庫教育大学教授）  
小橋 拓司 （兵庫県立加古川東高等学校教諭）  
岡崎 俊宏 （兵庫県教育委員会高等教育課指導主事）  
三田 耕一郎 （神戸市教育委員会神戸市教育センター主任指導員）

- 4 平成 25 年度の研究開発では、拡大研究委員として、下記の方々にも助言と指導をいただいた（役職・所属などは当時）。

平成 25 年度 奥村 弘 （神戸大学大学院人文学研究科教授）  
大津留 厚 （神戸大学大学院人文学研究科教授）  
藤田 裕嗣 （神戸大学大学院人文学研究科教授）  
中村 覚 （神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）

平成 25～28 年度 文部科学省指定研究開発学校

高等学校 地理歴史科

「地理基礎」「歴史基礎」実施報告書 (vol. 1)

神戸大学附属中等教育学校

# 目 次

巻頭言	1
I 研究開発の概要	2
1 研究開発課題	
2 研究の概要	
3 研究の目的と仮説等	
4 研究計画等	
5 研究組織	
6 神戸大学附属中等教育学校 教育課程表	
7 学校等の概要	
II 研究開発の経緯	16
1 研究開発の経緯	
2 第1回 拡大研究委員会 議事録	
3 第2回 拡大研究委員会 議事録	
4 第3回 拡大研究委員会 議事録	
5 第1回 運営指導委員会 議事録	
6 第2回 運営指導委員会 議事録	
III 「地理基礎」「歴史基礎」の内容構成（研究開発の内容）	31
1 教育課程の編成	
2 「地理基礎」「歴史基礎」の内容構成	
IV 実施の効果	43
1 教育課程内容の検証	
2 指導方法・教材等	
3 実施の効果	
V 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向	51
1 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向	

## はじめに

神戸大学附属中等教育学校

副校長 勝山 元照

本報告は、今年度から平成27年度までの4年間にかけて、文部科学省から研究開発学校の指定を受けて実施している研究開発の初年度実施報告である。研究内容は、地理歴史科の中に「地理基礎」「歴史基礎」を必修科目として置くことで、生徒の「グローバルな時空間認識」を有効に育成しようとする試みである。

本研究開発の背景には、加速度的に進行するグローバル化の現実があり、地球的規模で生じている人類的な重い諸課題があり、こうした諸課題を真剣に受止めた日本学術会議(日本の展望委員会・知の創造分科会)の提言がある。きわめて「難問」ではあるが、「持続可能な開発のための教育(E S D)」の視点をはじめ、新しい「地理の見方や考え方」「歴史の見方や考え方」が、その両者の関連性も含め求められているのである。

今年度から、研究開発学校制度の変更があり、従来までの3年間から4年間に指定期間が延び、最初の1年は準備期間に充てることができるようになった。この点はありがたく、現行指導要領や教科書分析、先行研究指定校である日本橋女学館の先生方の諸実践等から多くを学ぶことができた。また、運営指導委員の先生方はもとより、神戸大学の先生方からも多くの視点を得ることができた。関係の方々に深くお礼を申し上げたい。

研究実践としては、「地理基礎」「歴史基礎」の内容構成と典型テーマでの探究力・思考力育成型授業づくりを行なった。「地理基礎」では、現行「地理A」における「グローバル&ローカル」な視点は継承しつつ、地誌学習、系統地理学習、主題学習を関連付ける「相互展開学習」の視点で内容構成を行った。また、「歴史基礎」では、試行錯誤の末、世界史と日本史を融合させつつ、時系列的に単元を置く「単元史学習」という視点で内容構成を行った。同時に、あまり形式化することなく、近現代史や東アジア史の比重を高める工夫も行っている。「授業づくり」では、本校前身の附属住吉中学校以来の伝統である「協同学習」を、後期課程(高等学校段階)に部分的にせよ導入し、探究的かつ対話のある授業を通しての思考力育成をめざした。

研究実践における「試行錯誤の経緯」や自己評価に基づく「成果と課題」については、本報告書に詳しいが、圧倒的な研究課題を前に「日暮れて途遠し」の感は否めない。次年度からの本格実施に向け、さらなるご指導ご助言をお願いする次第である。

# I 研究開発の概要

## 1 研究開発課題

グローバル人材育成に向けて、地理歴史科を再編成して「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置し、中高一貫教育課程に位置付けながら、その学習内容と方法、評価について研究開発を行う。

## 2 研究の概要

高等学校（本校では後期課程，以下省略）地理歴史科に「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置することで、生徒のグローバルな時空間認識がどう育成されるかを、以下の方法により検証する。

- ① 現行の中学校（本校では前期課程，以下省略）社会科地理・歴史的分野及び高等学校世界史・日本史・地理各科目について分析・検証し，発達課題を踏まえた地理・歴史学習の再構成を行う。
- ② 後期課程4年（高1）に，「地理基礎」「歴史基礎」を必修科目として設置し，「グローバルな時空間認識」にとって有効な単元構成や年間指導計画を作成・実施する。
- ③ 地理歴史科における情報リテラシーの育成を図るとともに，協同学習による調査・発表・討論学習等を実践し，批判的・創造的思考力の育成を図る。
- ④ 新設科目における持続可能な開発のための教育（以下，E S D）の視点を強化するとともに，地歴学習と中高公民領域，総合的な学習の時間等との連携の在り方を検討する。
- ⑤ 「グローバルな時空間認識」がどう育成されたかについて評価・検証を行う。

## 3 研究の目的と仮説等

### (1) 研究仮説

#### (1) - 1 「現状の分析」

##### ① 「グローバルな時空間認識」の前提

今日進行しているグローバル化は、20世紀までに主張されていた「国際化」とは異なった現代的性格を有している。グローバル化は、国家エリートや機能集団の「国際化」を意味するのではなく、すべての人々を巻き込んだ地球的規模での新たな今日的諸課題を孕んでいる。

日本学術会議（日本の展望委員会・知の創造分科会『提言 21世紀の教養と教養教育』2010年）は「グローバル」化の現状及びそれに対応しうる「知」のあり方について、次のように指摘している。

「21世紀初頭の現在，地球環境・生態系破壊の危険性や，地域紛争・テロ，新型感染症，金融危機といった問題等，予測のつかない困難が人間・国家・人類社会を襲っている。他方，世界各国は，グローバルな経済競争のなかで自国の豊かさの維持・向上を図り，それぞれの社会内における種々の対立や貧困・差別等を解決しつつ，多文化共生・多民族共生とローカルな文化・社会の活性化を持続的に確保し促進するという課題や，それらの課題への適切な対応と活力ある豊かな市民社会の展開を図るという課題に直面している。

世界各国と人類社会が共通に直面しているこうした現代のさまざまな問題と課題は，それらに対応しうる知識・知性・教養の向上を切実に求めている。（中略）しかるに，その基盤となるべき教養は低下していると言われ，その再構築が喫緊の課題だと指摘されている。」

本研究開発は，上記学術会議の認識を前提とし，基盤となるべき教養につながる高校地理歴史科の再構築に向けて，「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置することで，生徒のグローバルな時空間認識にとって有効な科目のあり方を，研究・検証しようとするものである。

## ② 「グローバル人材育成」の必要性

知識基盤社会やグローバル化が進展する中で、「グローバル人材育成」の必要性が各方面で論究されており、グローバル人材育成推進会議（グローバル人材育成推進会議審議まとめ『グローバル人材育成戦略』2012年）は「グローバル人材」の要素として、以下の3点を提示した上で、要素Ⅰに関し、今後は、二者間折衝・交渉レベル及び多数者間折衝・交渉レベルの人材が継続的に育成され、一定数の「人材層」として確保されることが国際社会における今後の我が国の経済・社会の発展にとって極めて重要となると指摘した。

（要素Ⅰ） 語学力、コミュニケーション能力

（要素Ⅱ） 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

（要素Ⅲ） 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

さらに、こうした人材育成の基盤となる資質として、「幅広い教養・深い専門性」「課題発見・解決能力」「チームワークとリーダーシップ（異質な集団をまとめる）」「公共性・倫理観」「メディアリテラシー」等が指摘され、「21世紀型の教養」の重要性が強調されている。

グローバルな時空間認識は、特に「21世紀型教養」の基盤形成にとって、特に形而上の世界における国際性を育成する上で必要不可欠なものであるが、日本学術会議が指摘するように、世界史未履修問題の背景にある「授業時間数の減少」「小中学校における日本史中心の歴史教育」や、なかなか克服できない「知識詰め込み型教育」、高等学校で地理・日本史を全く履修しない生徒の存在等に起因する高校生の地理・歴史離れは、深刻な状況を招いている。（日本学術会議 高校地理歴史教育に関する分科会 提言「新しい高校地理・歴史教育の創造ーグローバル化に対応した時空間認識の育成ー」2011年）

## ③ 教科、他領域との関係

地理歴史科は、地球的規模での諸課題と密接に結びついているため、公民科との関係は極めて強い。また、新学習指導要領ではユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の掲げる、ESDの理念と実践が強調されている。

教育振興基本計画（閣議決定 2013年）では、ESDについて、持続可能な社会の構築という見地からは、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成する「持続可能な開発のための教育（ESD）」の推進が求められており、これはOECDが主導し国際合意された「キー・コンピテンシー」の養成にもつながるものであるとされている。

さらに、国立教育政策研究所は、ESDについて、その構成概念を「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済等）に関する概念」と「人（集団・地域・社会・国等）の意思や行動に関する概念」に大別している。また、激変する地球的規模での現代的課題について、主体的に関わる人間性の育成とともに、体系的かつ批判的・創造的な思考力の重要性を指摘するなど、学力論的な整理も行っている。本研究でも、ESDの概念を取り入れ、研究を推進する。

※研究代表者角屋重樹(2012)『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究最終報告書』国立教育政策研究所教育課程研究センター

### (1) - 2 「研究の目的」

① 本研究では、高等学校地理歴史科のA・B科目を再構成し、高校1年に必修科目「地理基礎」及び「歴史基礎」を設置することによる、生徒の地理的、歴史的な「見方や考え方」及び「グローバ

ルな時空間認識」形成における効果について検証する。

- ② 本校が中高一貫教育校である特色を活かし、発達課題を踏まえた上で、中学校社会科各分野及び高等学校地理歴史科B科目（選択履修科目）と「地理基礎」「歴史基礎」の位置付けを明確にするとともに、神戸大学をはじめとする大学の協力を得て、学問的研究成果・学際的な研究成果等にも立脚しつつ、単元構成や年間指導計画を作成・実践する。
- ③ 地図、地理情報システム（以下、GIS）及び史的資料をはじめとする地理歴史科の技能や情報リテラシー<sup>(注1)</sup>の育成を図るとともに、本校の協同学習の伝統を活かしつつ、単元構成や年間指導計画を作成し、調査・発表・討論学習等を実践し、批判的・創造的思考力の育成を図る。
- ④ ESDの視点等に見られる地球的規模での諸課題について、「地理基礎」「歴史基礎」に盛り込むとともに、本校が「グローバルキャリア人の育成」を教育目標として教育課程を編成していることを活かし、中高の公民領域、他教科及び総合的な学習の時間等との連携の在り方について検討する。
- ⑤ 「地理基礎」「歴史基礎」において、生徒の「グローバルな時空間認識」がどのように形成され、達成されたかについて、各種評価を行うとともに、評価方法の在り方について研究する。

### (1) - 3 「研究仮説」

「地理基礎」「歴史基礎」を本校4年生（高1）の教育課程に位置付け、以下のとおり研究開発を行う。

#### ① 「地理基礎」について

地理基礎では、中学校までに学習した地誌的な知識や見方と併せて、現代の世界的な課題の解決に寄与するために必要な基礎的・基本的な知識や地理的技能、「見方や考え方」に関わる系統地理的内容を取り入れた。そのため、生活・文化を軸にした地誌的学習と地球的課題を地理的に考察する主題的学習からなる「地理A」とは異なる。さらに、地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用し、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連付けて学習する「相互展開学習」（2単位科目）とした。

学習内容として、大項目は「現代世界の特質」及び「地球社会への関心」で構成し、中項目にグローバルなスケールでとらえる項目とグローバルなスケールとローカルなスケールの両面からとらえる項目を取り入れた。さらに、小項目に地理学の五大テーマである「位置と分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「空間的相互依存作用」、「地域」を盛り込み、国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な、基礎的・基本的な知識が確実に学習できるよう構成した。

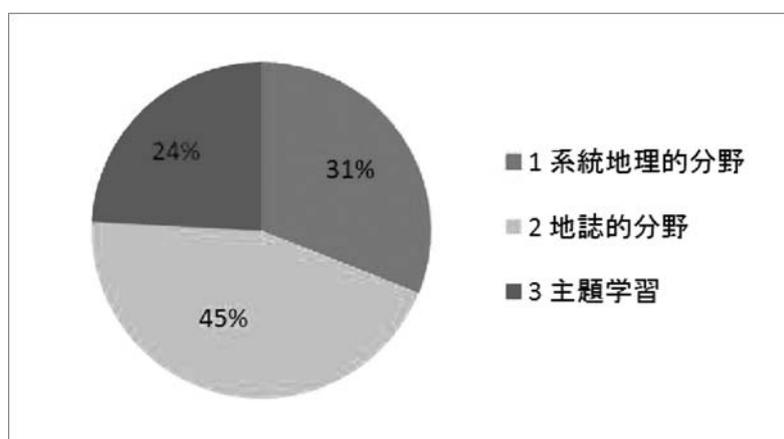


図1 生徒の関心・意欲の分野比較

図1から生徒の関心・意欲は地誌的学習や主題学習に対して高い場合が多く、地誌的学習・主題学習を行う前に系統地理的学習を集中的に行った場合、関心・意欲が下がる傾向が見られた。「地理基礎」では、中学校の「動態地誌的な学習」を踏まえつつ、上記「相互展開学習」を実施することで、「地理的な見方や考え方」を培い、高等学校「地理歴史科」の目標達成に寄与する。また「系統地理的考察」「地誌的考察」の中に主題学習が配置される選択履修科目「地理B」学習の基盤科目としても位置付ける。

本校には「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、「情報リテラシー」をテーマにした教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決的学習や地理的技能の強化に取り組む。

## ② 「歴史基礎」について

歴史基礎では、世界史と日本史について、両者の関連付けを超えた「融合」的学習を追求する。したがって、取り扱う日本史用語も現行の「世界史A」より増加する。なお、「世界史A」教科書における日本史用語が3%程度であるのに対し、「歴史基礎」では25%程度を想定している。

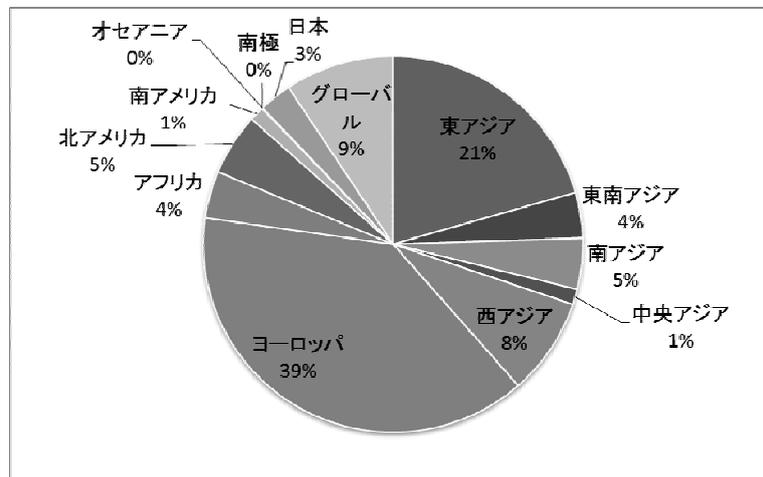


図2 世界史A教科書使用語句該当地域調査

また、毎時の授業において、探究的な学習となるよう工夫を行うとともに、単元全体を概括する際に「主題学習」を設け、多様な位相による「単元史学習」を行い、歴史的技能、「見方や考え方」の育成を図る。本校の教育課程全体においては、本科目を4年次（高1）に配することから、5年次以降履修する選択科目「世界史B」「日本史B」の基盤科目としても位置付ける。

学習内容の構成については、時系列的な構成をとるが、あくまでも独立した「単元」を骨格にすえた構成とし、「通史」「概観史」的スタイルはとらない。取り扱う時代に関しては、近代史・現代史学習の重要性を認識しつつ、自然と社会、世界の地域文化の特色等を考えた場合、一定の前近代学習は欠かせないものと考えた。したがって、ほぼ同時代の世界と日本の歴史を、近代史・現代史を重視しつつ時間軸にそって扱う、時系列優先型で単元史を構成する。

単元構成案の作成にあたっては、新学習指導要領で拡大した中学校段階の世界史学習との重複を避けながら、世界史に関する基本的知識・概念・技能等を習得・活用させ、歴史的思考力の育成を図ることを目指す。東アジア史の比重を高めるとともに、ローカルな視点も盛り込みつつ、中学校段階での日本史理解を世界史との関連性の中で再認識させることで、世界史と日本史の一体的理解を図る。また、2単位科目であることを踏まえ扱う内容は厳選する。

本校には「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、「情報リテラシー」をテーマにした教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、単元ごとに実施する主題学習等において、資料調査の方法、発表方法、歴史の解釈・評価・討論等の言語活動の積極的な活用を図り、技能面での強化に取り組む。

### ③ 「地理基礎」「歴史基礎」の教育課程上の位置付け

中学校社会科では「地理的分野」「歴史的分野」を先行必修修させ、3年次の段階で「公民的分野」を必修修させる。中学校段階での基礎的理解の上に4年次（高1）で、「地理基礎」「歴史基礎」を必修修させ、両科目を履修することで、高校段階における「地理歴史科」の目標を達成させる。

その上に5・6年次（高2・3）に選択履修科目「世界史B」「日本史B」「地理B」（各4単位）を置き、「地理歴史科」の発展的学習とする。また、さらに深く学ぼうとする6年次（高3）には、学校設定科目として「探究世界史」「探究日本史」「探究地理」（各2単位）を開講し、基礎科目等では困難な体系的なテーマを取り上げた学習を実施する予定である。

「グローバルな時空間認識」に関する発達課題の検討を踏まえた上で、中学校段階では、生徒の地理・歴史への興味・関心を引き出し、基本的知識の習得・活用を図るとともに、豊かな「時空間感覚」を培う。「地理基礎」「歴史基礎」は、地歴に関する各種知識・概念や技能、批判的・創造的思考力を基盤に地理・歴史的な「見方や考え方」を育成し、時空間認識を中学校段階から高等学校段階に移行させる上で、重要な鍵となる科目と位置づけている。

現代社会のグローバルな諸課題を認識する上で、公民領域との関係性が極めて重要となる。本校は、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標とする教育課程を編成しており、「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」は、ESDの実践そのものであり、「グローバルな時空間認識」育成にとって重要なパートナーである。また、宿泊行事（奈良、沖縄、イギリス）等においても、世界遺産学習を一つの柱としてESDに取り組んでいる。「地理基礎」「歴史基礎」と本校が目指す「グローバルキャリア人の育成」のための教育課程全体との関連性についても、検討を進める。

#### （1）－4 「期待される具体的成果」

本研究開発に取り組むことにより、次のような成果が期待できる。

- ① 「地理基礎」履修時（4年次（高1））に、地理学習への関心・意欲、理解が以前より深まるとともに、地理学習に関わる情報リテラシー（情報読解力、情報判断力、情報発信・交流力）や批判的・創造的思考力が深まることで、「地理的な見方や考え方」及び「グローバルな時空間認識」の基盤が形成される。
- ② 「歴史基礎」履修時（4年次（高1））に、歴史学習への関心・意欲、理解が以前より深まるとともに、歴史学習に関わる情報リテラシー（資料活用力、探究力）や批判的・創造的思考力が深まることで、「歴史的な見方や考え方（歴史的思考力）」及び「グローバルな時空間認識」の基盤が形成される。
- ③ 上記①②により、5年次（高2）以降で履修する地理歴史科B科目への関心・理解が深まる。特に、地理と歴史の関連性の理解、世界（史）と日本（史）の統一的理解について成果が見込まれる。
- ④ グローバルキャリア人育成やESDの推進を目指す本校教育、なかでも「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」等に積極的な影響を与えるなど、教育課程全体の改善に資する。

- ⑤ グローバル人材育成に関し必要な「幅広い教養・深い専門性」や「異文化理解」等の基礎となる知識・技能の習得，思考力の形成及び人格的資質等に寄与することができる。
- ⑥ 「地理基礎」「歴史基礎」に取り組むことで，中学校社会科及び高等学校地理歴史科B科目についての諸課題が明らかとなり，発達課題を踏まえた地理歴史（公民）学習の中高一貫カリキュラムの再構成につながる。

## （２） 必要となる教育課程の特例

- ◇ 必修科目である「世界史A」及び選択必修科目である「地理A」「日本史A」に代えて，「地理基礎」「歴史基礎」を必修科目とする。

## （３） 研究成果の評価方法

- ① 中高一貫校である特長を活かし，生徒の学習段階（前期課程（中学校段階），4年次（高1）における学習前・学習時・学習後，5年次以降（B科目履修時））に応じた学習アンケートを実施するとともに，定期考査等の結果も踏まえ，関心度・理解度について評価・検証する。
- ② 生徒が取り組んだ，学習課題・レポート・討論学習等の学習履歴から，新科目履修により培われた思考力，技能等について評価・検証する。
- ③ 上記①②に加え，本校が取り組むグローバルキャリア人育成カリキュラムに関する各種評価により，中高一貫校における教育課程全般との関係性を検証する。
- ④ 文部科学省，教育研究開発企画評議会協力者，大学・関連学会等の研究者並びに教科書執筆者，運営指導委員（地歴教育の実践者等）から，「地理基礎」「歴史基礎」の教育効果を中心に，研究計画全般について指導助言及び評価を受け，成果と課題を検証する。
- ⑤ 上記④の関係者に加え，シンポジウム等で有識者の参加を得て，グローバル人材育成の観点から広く意見を収集し，「地理基礎」「歴史基礎」に関する成果と課題を検証する。

## 4 研究計画等

### （１） 今年度の研究開発の概要

#### （１）－１ 平成25年度の実施内容

- ① 研究開発の内容・実施方法について，大局的見地からの指導助言
  - ・ 文部科学省や教育研究開発企画評価会議協力者から，内容・方法等研究計画全体についての指導助言を受けた。
  - ・ 運営指導委員会を年3回開催し，研究計画の具体について指導助言及び評価を受けた。
- ② 生徒の意識調査等の実施
  - ・ 前期課程を含む全校生徒の「地理・歴史」に関する意識調査等（関心・意欲等）を実施した。
  - ・ 新科目との比較データとして使用するため，生徒（4年生）の「世界史A」「地理A」に関する意識調査を実施するとともに，定期考査の分析等も含め，理解度，技能レベル等を把握した。
- ③ 教育課程上の諸課題の明確化
  - ・ 新学習指導要領に準拠した「地理A」「世界史A」「日本史A」，中学校社会科及び高等学校地理歴史科B科目等の教科書分析を行った。
  - ・ 教科書分析等を通して，内容構成に加え，基礎的・基本的知識及び基礎的な概念及び各種技能等についての，発達課題上の整理を行った。

- ・ ESDの視点からの「地理基礎」「歴史基礎」をはじめとする教育課程の検討を行った。
- ④ 「地理基礎」「歴史基礎」の実施プラン・評価プランの作成
  - ・ 「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画等の策定，教材開発に取り組んだ。
  - ・ 「地理基礎」「歴史基礎」の成果についての評価方法や評価指標を策定した。
  - ・ 「地理基礎」「歴史基礎」推進のため，先進校視察及び各種フィールドワーク候補地の調査を実施した。
- ⑤ 対外的発信とプレ検証
  - ・ 「グローバルな時空間認識」をテーマにした研修会を実施した。
  - ・ 研修会等で「地理基礎」「歴史基礎」の授業（一部）を試行的に公開・検証した。
  - ・ 研究開発実施報告書を作成し，文部科学省をはじめ関係各機関に送付した。

これらの取り組みの結果，地理基礎では，学習内容として，大項目は「現代世界の特質」及び「地球社会への関心」で構成し，中項目にグローバルなスケールでとらえる項目とグローバルなスケールとローカルなスケールの両面からとらえる項目を取り入れた。さらに，小項目に地理学の五大テーマである「位置と分布」，「場所」，「人間と自然環境との相互依存関係」，「空間的相互依存作用」，「地域」を盛り込み，国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な，基礎的・基本的な知識が確実に学習できるよう構成した。

歴史基礎では，世界史と日本史について，両者の関連付けを超えた「融合」的学習を追求した。計画段階においては，次の2案を示していたが，検討の結果，前述のとおり前近代においても時系列優先のA案で「単元史学習」構成案を作成することとした。

【A案】ほぼ同時代の世界と日本の歴史を，近代史・現代史を重視しつつ時間軸にそって扱う。

【B案】前近代は世界の諸文明として簡潔に扱い，「世界の一体化と日本」以降について近代・現代史を重視しつつ同時代史として扱う。

#### (1) - 2 平成 25 年度活動報告：日程

月	実施事項	運営指導委員会	拡大研究委員会	文部科学省等
4月	地歴意識調査1			
5月	3年沖縄研修旅行			連絡協議会(5/24)
6月	春学期中間考査 新科目「単元構成」 構想素案	運営指導委員会 兼委員会内研修 (6/26)	拡大研究委員会 (奥村弘先生) (6/10)	日本橋女学館高等学校研究発表会 (6/24)
7月	研究方法・指標策定 教科書分析作業		拡大研究委員会 (大津留厚先生) (7/26)	
8月	フィールド調査 教科書分析作業			
9月	教科書分析小括 新科目「単元構成」 中間報告			筑波大学附属高等学校訪問(9/13) 広島(中山修一先生)(9/19)
10月	春学期末考査 地歴意識調査2	運営指導委員会 兼校内研修 (10/21)	拡大研究委員会 (藤田裕嗣先生) (10/3)	

11月	5年休学旅行 2年奈良研修旅行			自己評価書・実施計画書提出依頼 (11/12) 大阪教育大学池田地区附属学校 研究発表会(11/16) 日本橋女学館高等学校研究発表会 (11/22) 広島大学附属福山公開研究会 (11/29)
12月	秋学期中間考査			筑波大学附属教育研究大会(12/7) 自己評価書・実施計画書提出 (12/13)
1月	E S Dの視点：検証 新科目「単元構成」 確定			研究協議会(研究開発学校フォーラム)、 自己評価書・計画書をもとに報告・ 指導助言(1/10)
2月	新科目一部試行 秋学期末考査	運営指導委員会 兼授業公開 (2/10)	拡大研究委員会 (中村覚先生) (2/24)	九州国立博物館(2/26)
3月	地歴意識調査3			25年度報告書刊行・発送

※上記に加え、校内研究委員会を毎週月曜日に実施し、検討を重ねた。

#### ※注1 情報リテラシー

現在、政治・経済等でグローバル化がますます進む中、人権や文化の相互尊重の精神と国際的視野をもった人材の育成が求められている。このような社会の中で地理歴史科が果たす役割について、今谷順重氏(社会科教育学/帝塚山大学教授、前神戸大学教授)は、社会生活についての客観的・科学的な理解を深める中で、社会のよりよいあり方や人間としてのよりよい生き方を模索しつつ、市民・生活者としての的確な判断や行動を主体的に自己選択・自己決定していくことができるような場面の必要性を指摘している(『新しい問題解決学習の構想』『社会科教育のニューパースペクティブー変革と提案ー』明治図書)。そこで「国際的視野を持ち未来を切り拓くグローバルキャリア人(グローバル人材)」の具体的な生徒像として「社会の成り立ちがわかり、共生の精神と広い視野から物事を考察・判断し、社会参画できる生徒」「地球規模の問題に対し、文化や価値観、政治体制等の様々な違いを理解し、尊重しながら解決していこうとする生徒」ととらえた。

一方、生徒たちの身近にはさまざまな情報があふれており、彼らは複雑化する情報化社会の中で生きている。そのような現状認識のもとで育成すべき資質・能力のひとつに、情報リテラシーがある。關浩和氏(社会科教育学/兵庫教育大学教授)は、情報リテラシーを「情報をそのまま受け入れるのではなく、自分で情報を収集したり、発信したり、交流したりという活動を組織することで、情報に対して批判的な検討を加えたり、他の情報を比較したりして、情報の使い手となる構え」と定義している(『情報リテラシーと社会科授業の改善』明治図書)。この關氏の定義と地理歴史科が考えるグローバルキャリア人(グローバル人材)の具体像を踏まえ、情報リテラシーを次の3要素に構成した。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 情報を収集し、情報の意図、社会背景等を読解する力(情報読解力)</li> <li>② 情報を批判的に考察し、相互尊重の態度で問題を解決する力(情報判断力)</li> <li>③ 情報の発信、交流等のコミュニケーション活動を通し社会に参画する力(情報発信・交流力)</li> </ul> |
|---|

#### (2) 全課程の修了認定の要件

「地理基礎」及び「歴史基礎」共に、「必履修」かつ「必修得」科目とする。

(3) 年次研究計画

	実施内容等
<p><b>第1年次</b></p>	<p>文部科学省，教育研究開発企画評価会議協力者，運営指導委員等の指導助言を受け，次の取組を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の「地理・歴史」に関する意識調査（関心・意欲・理解・技能等）の実施</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」との比較データとして使用するため，生徒の「世界史A」「地理A」に関する意識調査の実施</li> <li>・新学習指導要領に準拠した「地理A」「世界史A」「日本史A」等の教科書分析</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画等の策定，教材開発</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の評価方法や評価指標の策定</li> <li>・運営指導委員会及び研修会（テーマ：「グローバルな時空間認識」）の開催</li> <li>・各種フィールドワークの予備調査</li> <li>・先進校等視察による調査研究</li> </ul>
<p><b>第2年次</b></p>	<p>第1年次に策定した「地理基礎」「歴史基礎」の指導計画等に基づいて実践し，各種評価・検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の「地理基礎」「歴史基礎」に関する学習履歴の作成及び意識調査の実施</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画等及び評価方法・指標の評価・検証</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」と中学校社会科，高等学校地理歴史科及び教育課程全体との関係性の検討</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」を取り上げた公開研究会の実施</li> <li>・運営指導委員会及び講演会（テーマ：「グローバルな時空間認識」）の開催</li> <li>・各種フィールドワークの実施</li> <li>・外部講師招聘及び先進校視察等による調査研究</li> </ul>
<p><b>第3年次</b></p>	<p>第2年次に実践した「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し，各種評価・検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の「地理基礎」「歴史基礎」及び「地歴B科目」に関する意識調査等の実施</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画等及び評価方法・指標の評価・検証</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」と中学校社会科，高等学校地理歴史科，公民科，その他関連する教科等との関係性についての検証</li> <li>・中間報告会及び公開研究会（テーマ：「グローバル人材育成」）の開催</li> <li>・運営指導委員会及び講演会（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催</li> <li>・各種フィールドワークの実施</li> <li>・先進校等視察による調査研究</li> </ul>
<p><b>第4年次</b></p>	<p>第3年次の「地理基礎」「歴史基礎」等の成果と課題に基づいて改善・実践し，各種評価を行い，「地理基礎」「歴史基礎」の提言を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の「地理基礎」「歴史基礎」「地歴B科目」及びグローバルな時空間認識に関する全般的な意識調査等の実施と総括</li> <li>・新科目の目標・内容・単元構成・指導計画等及び評価方法・指標の総括</li> <li>・新科目と教育課程全体との関係性にもとづく実践と検証</li> <li>・報告会及び公開研究会（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催</li> <li>・運営指導委員会及び講演会・シンポジウム（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催</li> <li>・先進校等視察による調査研究</li> </ul>

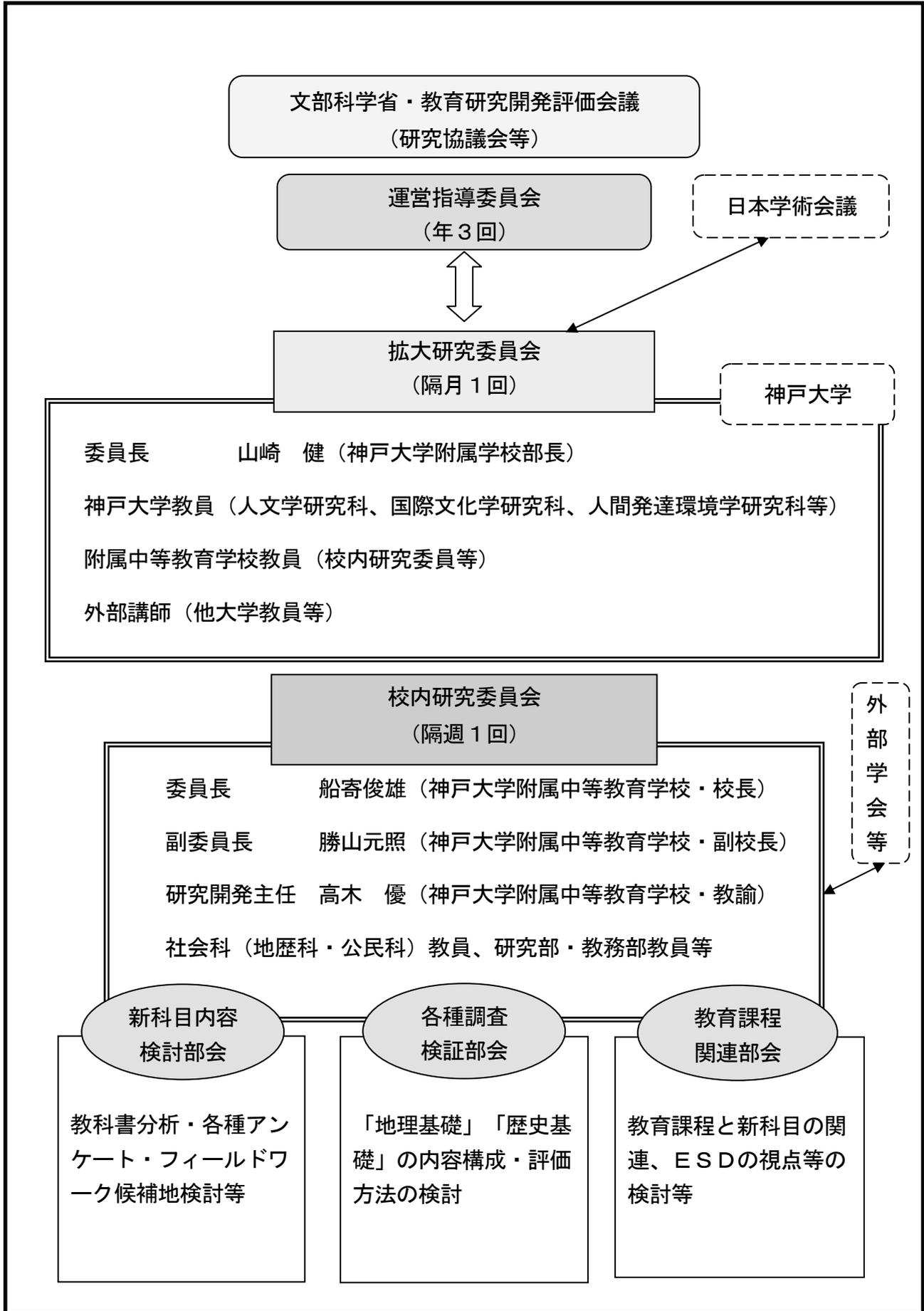
#### (4) 年次評価計画

	実施内容等
第1年次	<p>文部科学省や教育研究開発企画評価会議協力者、運営指導委員、研究協力者等から以下の項目に関する評価を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領に準拠した「地理A」「世界史A」「日本史A」等の教科書分析結果</li> <li>・生徒の「地理・歴史」に関する意識調査（アンケート等）の分析結果</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画等</li> </ul>
第2年次	<p>「地理基礎」「歴史基礎」を研究計画に基づいて実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒による学習履歴調査、アンケート及び定期考査等から、「地理基礎」「歴史基礎」の関心度・定着度評価等を実施する。</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画、評価方法や評価指標について、実践結果に基づき、運営指導委員、研究協力者等からの評価を受ける。</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」について公開研究会・講演会等を実施し、他校教員等の参加者による評価を受ける。</li> </ul>
第3年次	<p>第2年次の「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒による学習履歴調査、アンケート及び定期考査等から生徒の「地理基礎」「歴史基礎」及び「地歴B科目」に関する関心度・定着度評価等を実施する。</li> <li>・生徒によるアンケート調査や運営指導委員、研究協力者等から、「地理基礎」「歴史基礎」と関連性のある教科等との関係性についての評価を受ける。</li> <li>・中間報告会及び公開研究会等を開催し、他校教員・一般市民等の参加者からの外部評価を実施する。</li> </ul>
第4年次	<p>第3年次の「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒による学習履歴調査、アンケート及び定期考査等から生徒の「地理基礎」「歴史基礎」及び「地歴B科目」に関する関心度・定着度評価等を実施する。</li> <li>・「グローバル人材育成」をテーマに報告会及び公開研究会等を実施し、他校教員・一般市民等の参加者による外部評価を実施する。</li> <li>・第1年次と第2年次以降の生徒の意識調査等により、「世界史A」「地理A」（実施前）と「地理基礎」「歴史基礎」（実施後）の子どもの状況について比較・検証を行う。</li> <li>・「地理基礎」「歴史基礎」の教育効果について、総合的な検証・評価を行う。</li> <li>・運営指導委員、研究協力者等から、「グローバル人材育成」と「地理基礎」「歴史基礎」との関係性をはじめ、本研究開発全体についての評価を受ける。</li> </ul>

## 5 研究組織

### (1) 研究組織の概要

- ① 文部科学省の教育研究開発企画評価会議の指導、評価を受ける。また、運営指導委員会を設置し、専門的見地から指導、助言、評価を受ける。
- ② 日本学術会議からの指導、助言を受ける。
- ③ 拡大研究委員会を設け、神戸大学の人文系3研究科（人文学研究科、国際文化学研究所、人間発達環境学研究所）教員の支援を受けるとともに、必要に応じて、他大学の教員の支援を受ける。
- ④ 校内研究委員会を設置し、地理歴史科を中心に、三部会（新科目内容検討部会、各種調査検証部会、教育課程関連部会）とする。



## (2) 研究担当者

### ① 研究担当者

○研究主任   ▽各部主任

職名	名 前	教 科	備 考
校長	船寄 俊雄		委員長, 人間発達環境学研究科教授, 教育史
副校長	勝山 元照	地歴科・社会科	副委員長
教諭	○高木 優	地歴科・社会科	研究開発主任, 新科目内容検討部会
主幹教諭	石川 照子	地歴科・社会科	▽教育課程関連部会・教務部長
教諭	竹下 厚志	英語科	教育課程関連部会・研究部長
教諭	大八木優子	英語科	教育課程関連部会・E S D担当
教諭	水嶋 正稔	地歴科・社会科	▽新科目内容検討部会
教諭	小林 理修	地歴科・社会科	新科目内容検討部会
教諭	東 宏美	公民科・社会科	各種調査検証部会・明石校舎担当
教諭	上村 幸	公民科・社会科	▽各種調査検証部会
教諭	森田 育志	地歴科・社会科	各種調査検証部会

### ② 授業担当者

職名	名 前	科 目	職名	名 前	科 目
教諭	高木 優	地理基礎	教諭	水嶋 正稔	歴史基礎
教諭	森田 育志	地理基礎	教諭	小林 理修	歴史基礎
時間講師	上島 智史	地理基礎			

## (3) 運営指導委員会

### ① 組織

氏 名	所 属	職 名	備 考
高橋 昌明	神戸大学	名誉教授	歴史学 (日本史)
中山 修一	広島大学	名誉教授	地理学・E S D
和田 文雄	広島E S D・ユネスコスクール研究会	代表	地理学・E S D
杉本 良男	国立民族博物館民族文化研究部	教授	民族学
梅津 正美	鳴門教育大学	教授(副学長)	歴史教育 (世界史)
吉水 裕也	兵庫教育大学	教授	地理教育・社会科教育学
小橋 拓司	兵庫県立加古川東高等学校	教諭	地理教育
岡崎 俊宏	兵庫県教育委員会高校教育課	指導主事	地歴教育・教育行政
三田耕一郎	神戸市教育委員会 神戸市総合教育センター研修室	主任指導員	地歴教育・教育行政

### ② 活動記録

第1回運営指導委員会 (平成25年6月26日)	研究開発学校「計画書(第1年次)」の趣旨説明, 生徒意識調査(第1回)の報告, 運営指導委員からの提言, 教科内研修会(歴史教育, 地理教育)
第2回運営指導委員会 (平成25年10月21日)	研究開発学校「自己評価書(第1年次)」の説明, 生徒意識調査(第2回)の報告, 公開授業研究会実施と研究協議, 運営指導委員からの中間評価・提言(成果と課題), 講演会・校内研修会(グローバルな時空間認識)
第3回運営指導委員会 (平成26年2月10日)	研究協議会報告, 「研究開発学校実施報告書(第2年次:案)」の協議, 研究開発学校「計画書(第2年次:案)」の協議, 公開授業研究会実施と研究協議, 運営指導委員からの年次評価・提言

6 神戸大学附属中等教育学校 教育課程表（平成25年度）

課程 時期区分 学年 科目	前期課程				後期課程								
	基礎期		充実期		発展期								
	1年	2年	3年	4年	5年				6年				
					文系		理系		文系		理系		
国語	国語 4	国語 4	国語 3	国語総合 4	現代文 2	古典 2	現代文 2	古典 2	現代文 2	古典 2	現代文 2	古典 2	
社会 地理歴史 公民	社会 3	社会 3	社会 4	世界史A 2	世界史B 日本史B 地理B から2科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から2科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2	世界史B 日本史B 地理B から1科目 2
				地理A 2									
				地理基礎 2									
				歴史基礎 2									
数学	数学 4	数学 3	数学 4	数学I 3 数学A 2	数学II 4 数学B 2	数学II 4 数学B 2	数学II 4 数学B 2	数学II 2 数学B 2	数学III 6				
理科	理科 3	理科 4	理科 4	物理基礎 2	生物基礎 2	生物基礎(前期) 2	生物基礎 物理基礎 化学基礎 地学基礎 から2科目 2	化学 4	物理 生物 地学 から1科目 4	化学基礎 2	物理基礎 化学基礎 地学基礎 から1科目 4	化学 4	
				化学基礎 2	地学基礎 2	物理 生物 から1科目 (後期) 2							
						化学 2							
音楽 美術 芸術	音楽 1.3 美術 1.3	音楽 1 美術 1	音楽 1 美術 1	音楽美術 書道 から1科目 2									
保健体育	保健体育 3	保健体育 3	保健体育 3	保健 1 体育 2	保健 1 体育 3	保健 1 体育 3	保健 1 体育 3	体育 2	体育 2				
技術 家庭 情報	技術 2 家庭 2	技術 2 家庭 2	技術 1 家庭 1	家庭基礎 2	情報C 2	情報C 2	情報C 2						
外国語	英語 4	英語 4	英語 4	コミュニケーション 英語I 3 英語表現I 2	英語II 4 ライティング 2	英語II 4 ライティング 2	英語II 4 ライティング 2	ライティング 4 ライティング 2	ライティング 4 ライティング 2	ライティング 4 ライティング 2	ライティング 4 ライティング 2	ライティング 4 ライティング 2	
道徳/ 特別活動/ HR	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
総合的な 学習の 時間	Kobe プロジェクト 入門1 1.4	Kobe プロジェクト 入門2 2	Kobe プロジェクト 課題学習1 2	Kobe プロジェクト 課題学習2 2	Kobe プロジェクト 卒業研究1 1	Kobe プロジェクト 卒業研究1 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	Kobe プロジェクト 卒業研究2 1	
計	29	29	30	32	32	32	32	32	32	32	32	32	

(※1) 第6学年文系の選択Ⅰ：「探究世界史」, 「探究日本史」, 「探究地理」(学校設定科目) から1科目

(※2) 第6学年文系の選択Ⅱ：「現代社会」, 「政治・経済」 から1科目

(※3) 第6学年文系の選択Ⅲ：「探究国語」(学校設定科目), 「倫理」 から1科目

(※) 第6学年文系の選択Ⅱで「政治・経済」を選択した者は, 第6学年文系の選択Ⅲで「倫理」を選択すること

## 7 学校等の概要

### (1) 学校名, 校長名

こうべだいがくふぞくちゅうとうきょういっくがっこう  
神戸大学附属中等教育学校

校長 船寄俊雄

### (2) 所在地, 電話番号, F A X 番号

<住吉校舎>

兵庫県神戸市東灘区住吉山手5丁目11-1 TEL 078-811-0232 FAX 078-821-1504

<明石校舎>

兵庫県明石市山下町3-4 TEL 078-911-3631 FAX 078-914-8147

### (3) 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数, 学級数

校舎	前期課程						後期課程				計	
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		生徒数	学級数
	生徒数	学級数										
住吉校舎	115	3	121	3	111	3	144	5	142	5	633	19
明石校舎	74	2	68	2	74	2	-	-	-	-	216	6
計	189	5	189	5	185	5	144	5	142	5	849	20

※現在は、学年進行により後期課程第5学年までが在籍（平成26年度は第6学年までとなる）。

### (4) 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1		3	3		54		2		
講師	A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計				
13	3	2	5		86				

※平成26年度は第6学年の増設に伴って、教員増となる。

## Ⅱ 研究開発の経緯

## 1 研究開発の経緯

### (1) 校内研究委員会

定期的に校内研究委員会を実施した。校内研究委員会では、主に、「地理基礎」「歴史基礎」の単元構成について、検討・研究を重ねた。また、生徒への質問紙調査の結果を分析し、それを、「地理基礎」「歴史基礎」の実践に活かした。

4月15日(月)	校内研究委員会①	10月21日(月)	校内研究委員会⑩
4月22日(月)	校内研究委員会②	10月28日(月)	校内研究委員会⑪
5月13日(月)	校内研究委員会③	11月11日(月)	校内研究委員会⑫
5月20日(月)	校内研究委員会④	11月18日(月)	校内研究委員会⑬
5月27日(月)	校内研究委員会⑤	11月25日(月)	校内研究委員会⑭
6月10日(月)	校内研究委員会⑥	12月2日(月)	校内研究委員会⑮
6月17日(月)	校内研究委員会⑦	12月16日(月)	校内研究委員会⑯
6月24日(月)	校内研究委員会⑧	1月20日(月)	校内研究委員会⑰
7月1日(月)	校内研究委員会⑨	1月27日(月)	校内研究委員会⑱
7月8日(月)	校内研究委員会⑩	2月3日(月)	校内研究委員会⑲
7月26日(金)	校内研究委員会⑪	2月10日(月)	校内研究委員会⑳
8月22日(木)	校内研究委員会⑫	2月17日(月)	校内研究委員会㉑
9月2日(月)	校内研究委員会⑬	3月3日(月)	校内研究委員会㉒
9月9日(月)	校内研究委員会⑭	3月10日(月)	校内研究委員会㉓
10月7日(月)	校内研究委員会⑮	3月17日(月)	校内研究委員会㉔

### (2) 拡大研究委員会

有識者からの指導・助言を受ける拡大研究委員会を年4回実施した。拡大研究委員会では、主に、「地理基礎」「歴史基礎」の単元内容について、専門的立場から助言を受けた。それらの内容を、単元内容に反映した。

	日 程	拡大研究委員	所属研究科・専門分野
第1回拡大研究委員会	6月10日(月)	奥村 弘 教授	人文学研究科・近現代(日本)
第2回拡大研究委員会	7月26日(金)	大津留 厚 教授	人文学研究科・ヨーロッパ史
第3回拡大研究委員会	10月3日(木)	藤田 裕嗣 教授	人文学研究科・歴史地理学
第4回拡大研究委員会	2月24日(月)	中村 覚 准教授	国際文化学研究科・中東(サウジアラビア)

### (3) 運営指導委員会

運営指導委員会を年3回実施した。第1回運営指導委員会は、「地理基礎」「歴史基礎」の研究開発の概要についての説明を、第2回運営指導委員会は、「地理基礎」「歴史基礎」の実施例を研究授業として実施、研究協議の場で指導・助言をいただいた。また、校内研修会と兼ね、高橋昌明運営指導委員の講演を行った。第3回運営指導委員会では「地理基礎」「歴史基礎」の実践を公開授業として、広く公開し、研究協議の場で運営指導委員の指導・助言を受けた。これらの内容を、「地理基礎」「歴史基礎」の研究開発に活かした。

	日 程	参加者
第1回運営指導委員会	6月26日(水)	運営指導委員(7名)
第2回運営指導委員会	10月21日(月)	運営指導委員(6名)、高校教員など(13名)
第3回運営指導委員会	2月10日(月)	運営指導委員(6名)、大学教員、高校教員など(48名)

## 2 第1回 拡大研究委員会 議事録

日時：2013年6月10日（月）17:00～19:00

場所：神戸大学文学部小会議室（A111）

参加者：奥村教授，勝山，石川，高木，水嶋，上村，小林，東，森田，竹下，大八木

記録者：森田

### 1 自己紹介・報告

- ①参加者全員で自己紹介を行った。
- ②高木より，研究計画書および本校で実施される地理基礎に関する報告があった。
- ③水嶋より，歴史基礎における単元構成案に関して，主題学習の設定やテーマの検討についての課題が報告された。
- ④高木より，本校のグローバルな時空間や歴史基礎の「基礎」をどのように考えているかという質問があった。

### 2 「歴史基礎」研究開発に関する報告（奥村教授）

#### ①グローバル化に対応した時空間認識

##### 1) 「グローバル化」，「グローバル人材」

- ・漠然と使われる「得体のしれない」言葉。地球的規模での新たな今日的課題に直面する現代的な歴史段階を指す言葉？  
→定義をしっかりとしないといけない。
- ・現在がグローバル化であるとすれば，それ以前は非グローバルな社会  
→どのような社会なのかを考えないといけない。
- ・現代的課題と歴史・歴史教育は直結するわけではない。社会で起きている問題を具体的な事実でおさえることが大切。
- ・言葉におどらされないようにすることが重要。

##### 2) グローバルな時空間認識

- ・時間認識と空間認識バランスよく教育しないといけないのは当たり前。  
→これがなぜグローバルなのか。
- ・現行の日本史教育の問題点の学会の指摘：果たしてそうか？
- ・日本史と世界史の融合は簡単にできるのか。  
→何をもちて融合なのか。
- ・共通の土台がないと好き勝手やってしまう。
- ・事実の中でなぜあるのか，どのようにできあがったのか。  
→統合の論理を考えることに意味がある。

#### ②歴史を学ぶことの「基礎」とはなにか

- ・シンプルに考えると，「人間を歴史的存在として捉えること」  
→歴史のなかに存在しているものが「基礎」であり，これをつかまえる。
- ・「変化」の諸相をとらえることが第一であり，歴史的に存在してきた人々の歩みの上の現代社会があるという「継続」の視点が重要である。この「変化」と「継続」を同時に理解できるかが大事。

また、人間らしく生きることができる社会形成を目指した歴史（「発展」）の論理がある。

- ・歴史的存在として人間をどのように把握する。  
→「方法」を学ぶ：附属はやりやすい環境にある。
- ・「分析」と「総合」という科学の方法は共通なので、歴史がしっかりできれば他もできるということが大切。
- ・歴史資料  
→個別的で簡単に歴史像を引き出すのは厳しい、個別から普遍への展開のむずかしさ。
- ・やりやすい素材とやりにくい素材がある。  
→研究でできても教育でできるかはわからない。具体的に深めていく、発信していくことがグローバル化なのでは？

### ③自国史と世界史をめぐる問題

- ・二項対立的に考えるのではなく、誰がどのようなことをして社会が成り立っていくのか。
- ・なぜ現在そうなっているのか。 ←答えられない（弱いところ）。
- ・基本的な日本社会の近代への移行の基礎が教えられるべき。  
→なぜ存在したのか根拠をつかむ、ほかのところでも同じようなものがある。
- ・違いがわかるためには、自分のところの深い理解が必要。  
→ex) 自分の国のことを知っていないと、他の国に行ってもわからない。
- ・一定のしっかりした枠組みは大事にしないと、何を教えているのかわからなくなる。
- ・昔はイエ的な諸関係 →感覚的に理解。1980年まではわかっていたことが、過去のことになるうと  
している。共通でわかっていたことがわからなくなっている。
- ・具体的に考える。  
→弱い。目の前にあるものの歴史的展開
- ・当たり前だと思っていること、共有されているだろうということを教えないと当たり前でなくなっている。  
→この当たりの部分をちゃんと教えることが、過去のことと現代のことの違いを理解するうえで  
重要であり、これからの社会を担う人材に必要。

### 3 質疑・応答

**高木**：学習内容・学習方法、政治的なからみ、教員の指導方法などに関する質問があった。

**石川**：日本史必修の動きに関する質問があった。

**小林**：基礎内容や方向性などに関する質問があった。

**奥村教授**：

- 1) 政治的な問題に関しては、学術会議が出したことが問題なのでは。つくり方自体が権限をちりばめて生き残ろうとしている。（生徒と）1番近いところでやっている人たちでしっかりやらないといけない。
- 2) 自分の国だけでなく、対象としてとりあげるテーマがあれば別でも良いのでは。附属だからできる地理（歴史）からみる、深く掘り下げる。周りの人やもののあり方に迫れるところまでもっていきけるのが大切。異文化で取り上げるものがあったてもよいのでは？
- 3) 兵庫や神戸の事例からグローバルなことを考える素材などを提供できる可能性はある。

#### 4) 研究者

→今の教科書をこえたものは難しい。うまくテーマを見つけ出し、カリキュラム化していく。

**勝山**：「インターナショナル化」と「グローバル化」の違いは？また、上原専禄の評価等について質問があった。

**奥村教授**：

- 1) 「インターナショナル」→ソ連の崩壊であまり使われなくなった。
- 2) 「グローバル」はそれに代わってでてきているが、やはりあいまいな言葉である。
- 3) 「国際連合」が示すように、国民国家は国民国家群としてしか成立していない。
- 4) また、グローバルな社会ということから見えない問題として「地方自治」「地域社会認識の弱さ」ということがあげられる。
- 5) 生存権の意味を捉え直すことで歴史を見通すことが大切  
→人がどう生きていくのか（教育・衛生復興など）
- 6) 上原専禄の評価等については、かつて上原が提起した問題意識を、難しい作業だが現代的視点から再生していくことが重要ではないか。

**東**：「キャリア」とは何か、社会科のなかでどのように伝えていくか？

**奥村教授**

：何が私たちにとって共通の課題なのかをつかむことがものすごく大事になってきている。  
地域の課題や日本の課題などを見つけたり、共有したりするのが社会科なのでは？

**高木**：「ドーナツ化現象」など同じ言葉でも地域や国が変われば、意味が違う。そこまで引き出せたらいいのでは？

**奥村教授**

：評価の軸線上に乗せるのが難しい。評価をどうしたらよいか、そういうことを含めて評価していかないと。方法をどのように評価するか。

**勝山**：例えば Kobe プロジェクトの課題の発見・資料収集・現地調査・発表などをどのように評価するのが難しい。

**小林**：これまでやってきた教育（地域）との共同実践のなかで、おもしろかったことなどは？

**奥村教授**

：時間がずれる。物理的にやる上で難しい。全体がお互いに見えない。共通理解をつくるのが難しい。  
(できあがった頃に教師が転勤するなど)。

**上村**：どうやって子どもたちの評価をしていくのがよいのか？

**奥村教授**

：あまり複雑にしない方が良いのでは。シンプルにつけていく。そのなかで問題点を指摘・共有する。  
ポートフォリオもつくりすぎたら大変。

### 3 第2回 拡大研究委員会 議事録

日時：2013年7月26日（金）15:00～17:00

場所：神戸大学附属中等教育学校高大連携室

参加者：大津留教授，勝山，石川，水嶋，高木，上村，東，小林，森田，前川，高田

記録者：森田

#### 1 自己紹介

- ①参加者全員で自己紹介を行った。
- ②大津留教授の挨拶：世界史Aの教科書（近現代史の部分）を執筆しており，世界史教育にかかわっている。また，地域連携として小野市と連携している。青野原の調査を行った。また，各国史になっていないハプスブルク史入門を若手研究者とともに作成。
- ③高木より，拡大研究委員会の資料の説明があった。
- ④勝山より，拡大研究委員会の資料に関して補足があった。中学校は知識，高校は概念という歴史教育の年齢層における違いについて説明があった。

#### 2 大津留教授の講義「青野原俘虜収容所の世界」

**資料**：レジュメとして

平成24年度青野原俘虜収容所俘虜写真調査実績報告書  
俘虜収容所に生きる第一次世界大戦時青野原収容所の世界

##### 2-1 はじめに 資料と写真と現場のつながり

- ・「地域からみた世界史」－方法論，成果→教育？ 未知数のところがある。
- ・シュツトガルトの図書館に青野原の手記があり，大津留教授のところへ翻訳依頼。
- ・実際にこのような世界があったのか実感がなかった。→ケルステン日記  
⇒報告書に写真が実際にあった。しかし，場所を特定するのは難しかった。
- ・調査の報告会を実施。2006年，大学において，大学の地域連携の報告会を実施。
- ・2008年，オーストリアで展示会を実施。

##### 2-2 姫路へ

- ・姫路の寺に収容される。→他の日本の収容所よりもユニークだった。それはオーストリア兵やハンガリー兵がいたから。
- ・捕虜はあくまで軍人。軍人としてお互い名誉ある行動を。
- ・民族分布図→複雑であったことがわかる。言語分布図だと間違いの場合もある。11が正式の言語。
- ・国と国の対立は言語間の対立。→姫路の寺内で起こっていた。
- ・イタリア語を話す人が虐待される，ダルマチア海岸付近の出身者が多かった。

##### 2-3 青野原へ

- ・大谷系が多い。例）習志野，名古屋，青野原，久留米
- ・収容所ができあがったときは殺風景であった。

## 2-4 青野原の生活

- ・写真と手記で歩く。
- ・遠足とサッカー，屋根の上に布団を干していた。
- ・第一次世界大戦時に 300 枚もの写真をとることは容易ではない。従軍カメラマンの登場。  
→捕虜の姿，風景（小野市，加西市）：ジーマンスなどがお金を出していた？貴重なもの。
- ・青野原からみえる世界が正解であるというわけではない。
  - ★歴史を切り取る一つの方法，世界史をみる方法でもあるし，地域をみる方法でもある。  
地域を世界史的にみたらどうなのか。世界史的にモノをみることは大事なことである。
- ・いろいろな地域に世界史がある。空間的にも時間的にもある。
  - ★人間一人一人が生きていることが，世界史のなかでどうあるのかということにつながってほしい。
  - ★出てきた成果を地域に還元，発信することで世界史自体が変わっていくのではないか。

## 3 質疑・応答

**高木**：地域からみた世界史は興味深い。ただし，関連した地域を指定すると，特定の地域に住んでいる人限定の教材になってしまう。どのようにすれば地域から見た世界史を歴史基礎に組み込めるか。

**大津留教授**：細かいから基礎にならないということではない。逆に大きくても基礎にならないものもある。一種の方法論としてなら組み込めるのではないか。日々刻々と動いていることを世界史的にとらえることが大切。誰もが知る必要があることのみを学ぶということが，「基礎」というわけでもない。そこには工夫が必要である。もちろん，共通の知識が必要な部分もある。それに加えて，自分たちが生きている世界をみる必要がある。

方法の例として，①一国ごとの時系列になっていない，②時間軸で説明しない，③テーマごとという構成はある意味切れてしまう。ある程度完結させる。

**水嶋**：先生が執筆された教科書をつくられたとき，統一したコンセプトはあったか。

**大津留教授**：何回か編集会議を開いた。学術会議の基本的考え方，近現代史，日本史，世界史をどのように有機的に結びつけていくか。自国史と世界史，日本史と世界史でも違うものがある。ある意味で割り切りも必要なのではないか。延長線上に世界史基礎もあるのではないか。

**勝山**：奈良市も第二次世界大戦後，アメリカ進駐 PR センターがつけられた。兵隊キャンプなどは全国に事例が存在する。地域からみる世界史は歴史基礎にとって大事。方法を共有する→内容を共有するのは難しい。盛り込んでいく手法は？

**大津留教授**：主題学習などを積極的に位置付ける。自分で作業するための余白が必要なのではないか。社会史では「自分の足元を掘れ」という。これによって広がる鉱脈がある。その意味で青野原は掘りやすかった。これで，目に見えなかったつながりが見えるようになる。

**小林**：今日の学習指導要領では，主題学習の強調がある。高校生にどこまで調べさせるべきか。また，どのくらいの能力を求めるか。

**大津留教授**：教科書をつくる人が若くないといけないと感じている。若くないと新しい世代の感覚に合ったものをつくれぬ。しかし，教科書会社は若い人には一般論が書けないという。また，現場の先生の意見をくみ取る教科書がほしい。

**勝山**：歴史基礎で扱う時代は近現代に絞った方がいいのではないかと、という考えについてどう思われるか。また、前近代史は扱わなくてもよいという意見についてはどうお考えか。さらに、ヨーロッパ中心からの脱却が必要だという点についてもご教授願いたい。

**大津留教授**：世界史Aもはじめ前近代が中心であった。しかし、実際には古い時代を研究している人が多い。広がりをもつことが大切。近現代史を書けば、近代史がわかるというものでもない。入口は今の自分。これを助けるものが歴史「基礎」なのでは。

ヨーロッパ近代国家を中心とする見方への反逆を私が唱え始めた。教科書で全く触れられていなかったことを取り上げた。しかし、近代史だけを見ると、ヨーロッパ近代史は存在が消滅しかかっている。一方、ヨーロッパ以外には明確な近代史がある。逆に、ヨーロッパ近代史は自分たちでつくらないといけなかったので「アーリーモダン」、「モダン」の区別がない。「アーリーモダン」では何か見つかると「モダン」を侵食してしまう。

一方、同時代史的なものが近現代史。ヨーロッパ近代の価値基準から世界史を見るのは間違いで、克服しないとイケない。しかし、ヨーロッパ近代を分析することはおもしろいテーマ。どうできたか、人々が何を求めてきたか、矛盾など。これを伝えないし、やらないとイケない。ヨーロッパ近代史からみたものを克服しないとイケない。

最後に、教科書を作成した立場として、本当は、教科書を作成している研究者が、どのような意図でその教科書の内容を書いたのか話すべきだと考えているし、話したいと考えているが、なかなかその機会に恵まれないのは、残念である。

#### 4 第3回 拡大研究委員会 議事録

日時：2013年10月3日（木）17:00～18:00

場所：神戸大学文学部学生ホール

参加者：藤田教授，勝山，石川，水嶋，高木，上村，小林，森田

記録者：森田

##### 1 自己紹介

- ①参加者全員で自己紹介を行った。
- ②勝山より，文部科学省指定の研究開発校に関して説明があった。
- ③高木より，当日の資料（研究開発，地理基礎についての構想素案など）の説明があった。

##### 2 藤田教授の講話

- ・地理基礎，歴史基礎が話題になってきている中，2006年から「地域文化」をキーワードとした主題学習を近隣の公立高等学校と連携して実施している。毎年本学の学生が，高校生をサポートしてきた。数年間実施している中で，大学のカリキュラムに組み込む必要性を感じ，教職科目の教科教育法として取り入れられることとなった。そこから，教員養成の重要性も意識している。
- ・その中で，新学習指導要領が実施されるにあたって，これまでとどう違うかなどを学ぶために，現場の教員に講師として来てもらった。そのため，ある程度はカリキュラムも把握している。自分としての理想論からすると，『地理歴史基礎』の融合型のカリキュラムがあってもいいと思っている。私が専門としている歴史地理学はまさにそれを体現している。ただし，なかなか地理学に見てもらえず，歴史学に見られる。表面的には歴史であり，聞き取り調査などをする際にはあえて歴史地理学という学問名を使用しないこともある。
- ・地理基礎，歴史基礎は次善策であって，やはり地理歴史基礎に挑戦しなければならないのではないかと。基礎は必修2単位であり，現場で4単位は大きい。もう少し工夫があってもいいのではないかとというのが基本的なスタンスである。
- ・まずは，高校の現場で困らないようにしないといけない。何を学習するのかわからない科目になると，生徒自身の意欲がわからない。意欲がわかず勉強しなくなるのが怖い。現在，教育学部に所属する地理学の教員とも連絡をとっている。私は中学校の社会科に問題があると考えている。かつてはザブトン型であったが，今はパイ型になっている。教員は歴史出身の人が多いため，地理の授業内容がただ覚えるだけの薄いものになっている。書いてあることを覚えさせるだけの授業はよくない。統計をひたすら覚えさせるのは，ナンセンスである。年次を覚えるのも意味がない。学生当時は，そのような地理の授業に反発していた。調べて分かることをなぜ覚ええないといけないのか。これを今でも繰り返しているとまずいのではないかと。そのような形にはなってほしくない。
- ・私自身の経験からすると，このような地理の授業は面白くない。ただし，近年の大学入試センター試験をはじめ多くの入試問題は地理的見方や考え方を必要とする問題構成になっている。地図を普段から見る必要性，地理的な見方や考え方を身に付ける必要性を感じている受験生が増えたのではないかと。地理は役に立つのだというコンセプトは大切である。
- ・中学校の社会科の大きな問題を是正するためには，中学校の社会科の先生は大学で地理をしっかり学んだ先生にすべきだ。さらに，地理学の中でも歴史地理学であるべきである。生徒にこのような能力を身に付けさせるのだということが，地理と歴史の両面からアプローチできることが大切である。

- ・研究開発ではこのような議論をしてほしい。歴史を学んでも地理的な概念や要素を学べば役に立つさらに、それらが生徒にもわかるような精選されたものが必要である。

### 3 質疑応答

**高木**：中学校と高等学校のカリキュラムを連携して学習することの必要性について、現在の進捗状況についての説明および質問があった。

**藤田教授**：現場で教えることが大切。中学校と高等学校で学習内容の取り合いをしているように見える。ちなみに、地理歴史基礎が導入されれば、歴史地理学が復権する。具体的には歴史を学んできた人に地理の教材を提供する。他の地域だったらどうしたらいいのかという具体的な教材である。ヒントが散りばめられているようなものがあればいい。

**高木**：大学で研究者になる人は経済地理学のように、ある特定分野の専門家でよいが、学校の地理歴史科の教員では、歴史が専門である、地理が専門であるというべきではないと考える。大学での教員養成の立場としてはどうお考えか。もし、地理、歴史どちらもいとわない教員が増えれば、自然と科目として、地理歴史基礎が登場するのではないか。

**勝山**：例えば北前船や荘園の話。歴史学と地理学それぞれの方法はどうすればよいか。地理歴史基礎にもっていけない最大の要因として方法論を結びつけることが難しいことがあるのではないか。ザブトン型の方がいいと思うが、融合を考えるのであれば、パイ型の方がいいと思う。

**藤田教授**：地理学は地図をもとに考える。地理学は資料批判が苦手。なぜその地図ができたのかを考えないといけない。地図は作られた当時の人たちの考えを反映させたもの、その当時の人間のイメージであるという意識が大切。現在、復興支援をやっていて、今にどう生かすかを考える。地籍図はそれ自体が散逸してしまうと、根本がなくなる。これがいい加減だと土地争いの原因になる。われわれは土地家屋調査士と同じ技量を身につけないと遊れない。自分たちの技能が役に立つと思った。ここに社会貢献の形があった。学問を高めて市民と話し合っ社会に要求されるものになっていかなければならない。

**藤田教授**：カーナビゲーションシステムはできすぎている。便利なだけに人の能力を下げている。加えてGoogleの便利さ。

**高木**：史料は書いた人の意図が反映される。地理においても資料がすべて正しいというわけではない。同じ資料でも見せようとする人の意図、見せ方一つで違うものになる。鵜呑みにしないことが大切である。

**藤田教授**：地理は他のものに興味がないのはだめ。専門でないものにも関わらないといけない。相互の見方が地理的な見方や考え方にもつながってくる。

**森田**：非常勤講師をしていたときに、問題の質の良さからセンター試験の地理の問題は教材として使用していたが、そのときの生徒の反応が、「これは暗記では対応できない」というものであって、今考えれば、藤田先生たちの意図が問題を通じて伝わっているものと改めて感じた。

## 5 第1回 運営指導委員会 議事録

日時：2013年6月26日（水）17:00～19:30

場所：神戸大学附属中等教育学校集会室

参加者：高橋，杉本，梅津，吉水，小橋，岡崎，三田（以上，運営指導委員），山崎，勝山，石川，  
高木，水嶋，上村，小林，東，森田

記録者：小林

### 1 自己紹介・趣旨説明

- ①参加者全員で自己紹介を行った。
- ②高木より，研究開発学校の概要および地理基礎に関する報告があった。主題学習を重視し，地誌的学習を中心としつつ系統的学習や主題学習を相互に関連させていく素案が示された。
- ③水嶋より，歴史基礎に関する報告があった。内容を精選しつつ全時代を扱い，主題学習を單元ごとに設定していく素案が示された。本校A案は時系列を重視した編成，本校B案は前近代を簡潔にしつつ世界の一体化以後を重点的に取り扱うものとされた。
- ④勝山より，歴史基礎に対する補足説明があった。精選の必要のためには哲学が必要であり，自国史と世界史との関係のとらえ方，基礎科目の特色，地域といった諸点について，基本的な考え方を定めることが課題として示された。また，高校段階では，概念の習得や歴史の多面的なとらえ方を身につけることが重要であるという立場が示された。

### 2 運営指導委員からのコメント

- ① 高橋先生
  - ・ 学術会議の議論の立脚点としては，地歴を別々のものではなく，一体のものとして扱う「地歴基礎」が望ましいということだった。結局，現実・現場が難しいので形は別々になったが，実践としては，地歴が相互に乗り入れるような形になるとよい。
  - ・ いろいろな事情で，2 単位にせざるをえない。小手先の切り詰めではどうにもならない。歴史基礎に必要な精選では，見かけ上重要なものも落ちる，特殊な組み立てとなる。おもいきった構成を試みてもらいたい。
- ② 杉本先生
  - ・ 学術会議 20・21 期は油井先生のリーダーシップが大きく，意欲的な議論をした。
  - ・ 何が「基礎」なのか，地理Aと地理基礎は何が違うのか，基礎は何を意味するのかをはっきりさせる必要がある。
  - ・ 日本史と世界史との壁があり，インターディシプリンの大変さがある。
  - ・ 地理歴史と公民の中で，歴史的な経緯やなわばりのようなものもあるが，それらにとらわれず，いろいろな見方をとりいれてもらいたい。
  - ・ いままで異文化共生といえば，日本社会に異文化を取り込むという，ある意味排除の論理を基礎としていた部分があった。神戸はアジア系住民が多い土地であり，互いにリスペクトするという態度を尊重して，グローバルといううたい文句を実践へとつなげてほしい。
- ③ 梅津先生
  - ・ 特に歴史基礎について，5点コメントしたい。
  - 第1に育成すべき人間像（達成すべき目標）の具体化が必要ではないか。どういう資質や能力を育成

するのか。

第2に授業の目標（方法を具体的に意識）の明確化。内容と方法を切離して考えることはできない。

第3にそれに応じた内容の精選。A・B案ともまだまだ検討が必要ではないか。

第4にそのための方法の検討。思考力育成のための5つの視点が列挙されているが、もっと焦点を絞るべき、大切なことはクリティカルシンキングの育成ではないか。

第5に制度的改革との関わりで、思考力を評価できるような指導と評価の一体化にとりくんでもらいたい。

- ・通史を教えたいというワナからいかに逃れるか。現代的課題との関係から主題を設定することを心掛けてほしい。

④ 吉水先生

- ・グローバル人材育成という目標の「地理基礎」「歴史基礎」における具体的検討が必要。
- ・また基礎とは何か、身につけるべき技能とは何かという内容の検討が必要。やはり「地理A」と「地理基礎」の違いがよく見えない。
- ・また、シティズンシップという観点、研究開発結果の汎用性について、考慮してもらいたい。

⑤ 小橋先生

- ・現場の教員の立場からコメントしたい。
- ・基礎とは何か。B科目とどうつなげていくか。知識的な基礎として、基礎は近現代と重点化すればわかりやすい。しかし、基礎が学び方・スキルの意味なら違ってくる。
- ・「現代史」(2単位)の経験から、世界史と日本史の融合は「やりにくい」。生徒の発想の転換が追いつかないこともある。
- ・地誌的学習が中心の地理基礎の場合、中学校のカリキュラムとの差別化はどうか。世界的には地誌揺り戻しは珍しい。
- ・高1の学年には社会科学としての知識から概念への高まりを理解させることが厳しい。人権・差別への考え方で生徒自身の社会認識(実感)との関係で難しい面を感じている。
- ・現代に続く流れとして歴史的には、空間的にはと構成されるような内容を期待したい。

⑥ 岡崎先生

- ・理科の基礎科目導入。先んじて基礎科目ができている事例が参考になるのでは。
- ・科目間連携。現場では難しいといわれる。それができるようになるとよい。
- ・「なぜ地理や日本史をやらない」という苦情がある。とくに地理は理系というイメージがある。
- ・現状のA科目の位置づけが、誤解されていることも多く。卒業するのに便利な科目という位置づけとして理解され、本当の意味の基礎にはなっていない。
- ・今の教員は、大学入試も含めて、学んでいない科目が多い。そのあたりの力量とのからみもからめて、このようにやればできるというモデルを示してほしい。

⑦ 三田先生

- ・中学校の立場からいうと、「知識から概念へ」はよいと思う。中学でも取り上げてみるのだが、目標と実際のギャップが大きい。
- ・歴史的・地理的な見方・考え方や概念を通して「高校になったな」という感覚を大切に育ててほしい。
- ・また、B科目とのつながりについても追究してほしい。

<高橋先生の補足>

- ・「基礎」の意味は、やはり「歴史的なものの見方・考え方」ということではないか。
- ・学術会議では、短期的な改革目標と長期的な改革目標を考えた。長期は新科目を創設するという。短期は、B科目の改革も（内容が過多すぎる）含めて、「見方や考え方」をどうするのかという点で提言している。
- ・歴史基礎の場合、日本史教員の方への負担が遥かに大きい。世界史に比べて日本史教員が頑張らないと上手くいかない。日本史が世界との関係をどう作っていくか。

3 質疑

**高木**：基礎的概念として学習内容と学習方法がある。学習方法、特に技能を学ぶのか、技能で学習内容を学ぶのかについて、評価方法と絡めた質問があった。

- ・吉水先生 学習内容を学ぶための技能である。
- ・小橋先生 生活の地理。役に立つものとしての重要性がある。

**勝山**：グローバル人材の育成（これ自体面妖な言葉だが）は、大学との整合性を図りつつ、全校的に取り組もうとして、本学の国際コミュニケーションセンターの石川慎一郎先生の提言を参考にしている。つまり、グローバル化が実用的な脈絡で語られることが多いが、精神的な意味でのグローバル化が重要であり、地理基礎・歴史基礎はそういう形而上の分野を担当することになり、石川先生もクリティカルシンキングということを重視している。

知識と概念を例示すると「裁判と司法」の関係にあたるが、概念の習得と「見方や考え方」は同時形成的な印象を持っている。

主題学習中心ということで、現代史に限定することがよいのかという質問があった。

- ・高橋先生 前近代もある程度必要だと思って案も提示した。もちろん前近代のウェイトは少なく近現代が厚くなる。もちろん、近現代だけの方が量的には教えやすいがどうなのか。いろいろなやり方がある。東アジア中心でみるとかなど。また、流通や消費文化といった面を強調することは、社会の変容の中で現代的課題が変わってきており、よいことだと思う。
- ・梅津先生 今日的な諸課題からということは、近現代だけ教えればよいということにはならないレバノン杉の話などは、ESDに通じる。  
クリティカルシンキングを重視し、時間の系列の枠だけは残しつつも主題学習を軸にすればよいのではないか。グローバルヒストリーという時に、理論構成の選択（従属理論。世界システム論）が迫られるだろうが、次回具体化を期待したい。
- ・杉本先生 がんばらない人でもできるようなものをつくりだすために、がんばってほしい。

## 6 第2回 運営指導委員会 議事録

日 程：2013年10月21日（月）

- 内 容：
- 1 公開授業①（地理 A(地理基礎)：4年5組教室(E棟2階)） (10:45～11:35)
  - 2 公開授業②（世界史A(歴史基礎)：4年2組教室(E棟2階)） (11:45～12:35)
  - 3 授業研究会（第2回運営指導委員会：集会室(C棟4階)） (13:30～15:20)
  - 4 講演兼校内研修会（講演者：高橋昌明先生：集会室(C棟4階)） (16:00～17:30)

参加者：濱野（指導助言者）、高橋、梅津、吉水、小橋、岡崎、三田（以上、運営指導委員）、  
揚村、厚海、牛込、（日本橋女学館）、福田、三原、池田、梶木（以上高校教員）  
小宮、諸星、知名（帝国書院）、山崎、勝山、石川、水嶋、高木、上村、東、小林、森田、奥村  
記録者：森田、小林

### 1 開会あいさつ(山崎健附属学校部長)

### 2 自己紹介・趣旨説明

- ①新たに運営指導委員となった和田代表紹介。
- ②指導助言者の濱野教科調査官紹介。

### 3 趣旨説明

高木より、今回の運営指導委員会の趣旨と当日の資料について説明があった。

### 4 授業者から

高木と水嶋より、単元構成の素案と当日の授業について説明がなされた。

### 5 運営指導委員からの助言

**司会**：最初に、「地理基礎」についてコメントをお願いしたい。

**和田**：全国的に高校では、授業において、言語活動やグループ活動・発表はあまりやられていないのではないか。今回の授業は意欲的な試みである。その趣旨について補足をお願いしたい。

**高木**：言語活動については、高校の授業でも重要視されてきており、学習指導要領でも推奨されている。また、文部科学省でも一斉授業のみではなく、グループ活動を取り入れた授業やホワイトボード、付箋を使用した授業などがリーフレットで紹介されている。「地理基礎」では探究的な学習を取り入れる中で、学習内容だけでなく、学習方法の研究も行っており、今回の授業もそれに基づいたものである。

**高橋**：貿易量や人の行き来が増えていることの意味について、資料BやCを手がかりにより深められるのではないかと。国際交流の意味・9.11の意味づけ・イスラームのとらえ方等についても工夫ができるのではないかと。

**高木**：今回は、現代社会の学習内容も検討し、より「地理基礎」で取り上げるべき内容を扱った。また、日豪関係について、資源を通じた結びつきについては前時までには扱っている。

**梅津**：基礎とは何かを考えたい。特に、知識内容、方法的技能、思考力・判断力の三点に着目したい。内容と思考判断については、事実から情報を読み取り、関係性について帰納的推論を行わせようとするものだった。観光立地についての概念化のように、関係の先には本質があると考えているが、今回は

関係をおさえるところまでにとどまっていた。方法については、個の学びから集団の学びになることの意味とそれによって身につける能力は何かということについて質問したい。

**高木**：グループ活動を行う際も、生徒一人一人の学びは大切である。そのために、グループ活動を行う前に、必ず、個人の思考の時間を設けている。

**勝山**：高校段階のグループ活動については、答えが決まっていることではなく、多様性や価値観を保障できる問いがふさわしいと考える。質をさらに高めていきたい。

**吉水**：テンポのよい授業だった。今後、グローバルとローカル間のスケールの組み方をどうするか。課題の追求に最も適切なスケールとは何かなど、地理的な見方を内容とからめてどのように配置していくのか。地理基礎というカリキュラム全体のなかにもどう配置していくのかを検討していただきたい。

**高木**：今回いただいたご助言を、これからの研究開発に活かしていきたい。

**岡崎**：いろいろな観点から情報をとり入れ、結びつけていける試みだった。資料や地図に親しむという、基礎中の基礎をしっかりと行うという点でも優れていた。

**三田**：中学までとは違った視点に広げていく授業だった。この先、子どもたちの認識がどのように変化していくか、注目していきたい。

**司会**：続いて、歴史基礎についてコメントをお願いしたい。

**高橋**：主題は「文化の出会い」ということで、マテオリッチの地図を糸口とし、ねらいもわかりやすかった。中国人の世界観などから、もう少し議論を深めることができればさらによかった。日本との関係については、新井白石によるシドッチの尋問のような、より直接に日本とかかわる事例もある。日本を世界史に組みこむことは簡単ではない。うまく組みこめるよう工夫が必要である。

**和田**：最近では取り扱われなくなった地図の歴史を組みこんであり評価できる。地歴融合を意識した実践だったのか。

**水嶋**：本校の研究は地歴融合ではないが、隠しテーマとして考えてはいる。

**梅津**：歴史についても基礎とは何かを考えたい。子どもたちが活用する思考・判断とは何か。子どもが認識したものは何だったのか。本時の内容は、マテオリッチの戦略であり、興味深い授業だった。ここから歴史基礎を構想するヒントを汲み取りたい。人が何かを叙述することの意味をメタヒストリー、メタ叙述としてとらえ、残されたもののメッセージを吟味させる。読み取らせ、読み解かせることは、メディア・リテラシーの涵養ともなる。また、文化が接触するとはどういうことか。文明（システム・汎用性）と文化（価値観・規範・生活習慣・ローカル）の関係、何が変化し、何が変化しなかったのかなど、手がかりは多くある。言語的な活動については、いろいろな意見を聞くのであれば、オープンエンドな展開にできるように配慮すべきである。最後に、基礎とは何か。国民・市民教育の基礎、社会科学の基礎としての歴史基礎、中学歴史から高校歴史に入る導入、いろいろ考え方はある。教科の役割、教科をとらえる視点の違いについて考えてもらいたい。

**吉水**：育てるべき子ども像として批判的思考力ができる子どもというものがある。そのために、グループ活動を取り入れるにあたって、一時間でまとめるためにどう工夫するかが課題となる。

**小橋**：まず内容については、授業のレベルとしては高めであり、ある程度の知識が入っていないと難しい。次に、歴史とは何かということを見ると、それは歴史を解釈した世界観を扱うものである。地図とは作者の世界観を表すものであり、世界観の変化や、さまざまな世界観を相対化したメタ認知の獲得にはよい素材と思われる。

**岡崎**：年表から事実をとりだして使うことや、ねらいに応じたまとめを生徒がどこまでできるかが課題となる。

**三田**：子どもたちが楽しく学んでいる。話し合いのときには生徒は、いろいろなことを言っていたが、発表の場ではそれがうまく出てこなかった。子どもたちが持っている力を十分発揮される場面をどのように作っていくか。

**司会**：基礎とは何か。主題学習，グループ学習等，様々な話題が出たが，参観の先生方からもご意見を伺いたい。

**揚村**：日本橋女学館の研究の経験から課題を述べたい。地理基礎の課題としては，地誌と系統地理をどう展開していくかが問題となる（地誌に傾斜しがち）。地誌の方がやりやすく，流れやすい。また，地理的なスキルを基礎として扱うのか。歴史基礎と同様，地理Bの編成もにらんで精選が必要ではないか。

歴史基礎については，2単位のなかでの精選が必要である。カリキュラムは，字句修正が柔軟にできるように，指導計画と実践とのずれについては，出てくる課題を参考意見として使えるようにしてもらいたい。どの学校においても実践できるような研究開発を期待したい。

**厚海**：いろいろな論者がもっている基礎概念を一般化することが難しい。現代を考える思考力・判断力の基礎となるものをどうとらえるか。グループ学習の実践について，日本橋女学館では，最初はおそろおそろ，だんだん長くしていき，どんな意見でも言っている環境が育まれていった。人が人の中で育っていく，友だちと助け合いながら高め合っていける学習として非常に有効と考える。

## **6** 指導助言（濱野清文部科学省初等中等教育局教育課程課調査官）

本研究は，次の学習指導要領検討の基礎となるものであり，10年後に大きな形で影響を与えるものである。指導要領にとらわれずに何でもできるが，ではどこまでやるのか。必履修科目に関わる研究であることを踏まえて取捨選択をし，大きな見通しをもって取り組んでももらいたい。言語活動，思考力・判断力，ESDなど，継承できるものを継承し，必要なものを整理していってもらいたい。全国の学校の参考にできるような，科目の目標・内容・内容の取り扱い・年間計画といった，おおまかなもののモデルの開発を期待する。発展的な部分については自由だが，基礎的なもの，ミニマムな内容を精選し，他教科科目との関係の整理（ヨコの部分）するとともに，小中高のつながりの再検討（タテの部分）までやっていただければ。必履修の科目として，現場に大きな影響を与えるものであることを意識して，すでにあるものはしっかり使いつつ，よりよいものを作っていってもらいたい。

## **7** 閉会あいさつ（勝山元照副校長）

本日は運営指導委員の先生方，指導助言の濱野先生ありがとうございました。特に歴史基礎については，2単位という時間の制約のなかで，どのような単元構成にすべきか戸惑っていたが，ご助言をいただき方向性が見えてきた。地理については，地図を通して世界と仲良くなれるものにとらえている。また，ESDの観点については地理に一日の長がある。歴史におけるESDとは何なのかということも今後考えていきたい。本日は色々刺激的な提言をいただき，ありがとうございました。

### Ⅲ 研究開発の内容

## 1 教育課程の編成

### (1) 編成した教育課程の特徴

#### ① 「地理基礎」について

地理基礎では、中学校（本校では前期課程）までに学習した地誌的な知識や見方と併せて、現代の世界的な課題の解決に寄与するために必要な基礎的・基本的な知識や地理的技能、「見方や考え方」にかかわる系統地理的内容を取り入れた。そのため、生活・文化を軸にした地誌的学習と地球的課題を地理的に考察する主題的学習からなる「地理A」とは異なる。さらに、地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用し、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連づけて学習する「相互展開学習」（2単位科目）とした。

学習内容として大項目は「現代世界の特質」及び「地球社会への関心」で構成し、中項目にグローバルなスケールでとらえる項目とグローバルなスケールとローカルなスケールの両面からとらえる項目を取り入れた。さらに、小項目に地理学の五大テーマである「位置と分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「空間的相互依存作用」、「地域」を盛り込み、国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な、基礎的・基本的な知識が確実に学習できるよう構成した。今年度、教育課程上は「地理A」の枠組みではあったが、地理基礎的内容を組み込みつつ展開した。

#### ② 「歴史基礎」について

歴史基礎では、世界史と日本史について、両者の関連付けを超えた「融合」的学習を追求した。取扱う日本史用語も現行の「世界史A」より大幅に増加した。また、毎時の授業において、探究的な学習を取り入れる工夫を行うとともに、単元全体を概括する際に「主題学習」を設け、多様な位相による学習を行い、歴史的技能、「見方や考え方」の育成を図る「単元史学習」（2単位科目）とした。本校の教育課程全体においては、本科目を4年次（高等学校1年次に相当）に配することから、5年次以降履修する選択科目「世界史B」「日本史B」の基盤科目としても位置付ける。

学習内容の構成については、時系列的な構成をとるが、あくまでも独立した「単元」を骨格にすえた構成とし、「通史」「概観史」的スタイルはとらない。取り扱う時代に関しては、近代史・現代史学習の重要性を認識しつつ、自然と社会、世界の地域文化の特色等を考えた場合、一定の前近代学習は欠かせないものと考えた。但し計画段階においては、次の2案を示していた。

【A案】ほぼ同時代の世界と日本の歴史を、近代史・現代史を重視しつつ時間軸にそって扱う。

【B案】前近代は世界の諸文明として簡潔に扱い、「世界の一体化と日本」以降について近代・現代史を重視しつつ同時代史として扱う。

本年度検討の結果、前近代においても時系列優先のA案で単元構成案を作成することとした。

単元構成案の作成にあたっては、新学習指導要領で拡大した中学校段階の世界史学習との重複を避けながら、歴史に関する基本的知識・概念・技能等を習得・活用させ、歴史的思考力の育成を図ることを目指した。東アジア史の比重を高めるとともに、ローカルな視点も盛り込みつつ、中学校段階での日本史理解を世界史との関連性の中で再認識させることで、世界史と日本史の一体的理解を図った。また、2単位科目であることを踏まえ扱う内容は厳選した。今年度、教育課程上は「世界史A」の枠組みの中で、部分的に歴史基礎的内容を組み込みつつ展開した。

## 2 「地理基礎」「歴史基礎」の内容構成

### (1) 「地理基礎」の内容構成

◇ 単位数 2単位

◇ 目 標

現代世界の地理的な特質並びに地表面に展開する諸事象について、人間と自然環境並びに社会環境との関係及び空間的・歴史的な地域の変容とを関連付けながら考察する力を高めるとともに、地理的な見方や考え方を培い、持続可能で活力ある世界を主体的に構築する日本国民としての自覚と資質を養う。

◇ 内 容

#### (1) 現代世界の特質

##### ア グローバルなスケールでとらえる現代世界

グローバルなスケールとローカルなスケールの二つの視点からの学習を行うために必要な内容を中心に学習を進める。その際、地球儀や世界地図に加え、GISから得られる電子地図(電子化された一般図と主題図)や衛星画像等の読みとりを行う。

##### ① 位置と分布

・回転楕円体としての地球、緯度・経度と図法、大陸と州

##### ② 場所

・自然環境(プレートテクトニクスと大地形、大気・海洋の大循環と気候・植生帯)  
・社会環境(人種、民族、言語、宗教)

##### イ グローバルなスケールとローカルなスケールでとらえる現代世界

地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用するとともに、現代世界及び地域の諸課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連づけた学習(相互展開学習)とする。その際に、従来の地球儀や世界地図に加え、GISから得られる電子地図や衛星画像や統計情報等の読み取りを行う。

##### ③ 人間と自然環境との相互依存関係

・熱帯の気候と人間の活動

(熱帯の気候、東南・南アジアの生活・文化、防災問題)

・乾燥帯の気候と人間の活動

(乾燥帯の気候、西・中央アジアの生活・文化、オセアニアの生活・文化、エネルギー問題)

・熱帯・乾燥帯の人間の活動

(アフリカの生活・文化、南アメリカの生活・文化)

・温帯の気候と人間の活動

(温帯の気候、ヨーロッパの生活・文化、東アジアの生活・文化、産業と貿易)

・亜寒帯・寒帯の気候と人間の活動

(亜寒帯・寒帯の気候、北アメリカの生活・文化、環境問題)

#### (2) 地球社会への関心

将来の地球社会に対する関心を深めるために、知識と行動の離反を避け、環境の認識、地域的・国家的課題への参加、多文化的・国際協力の促進等を協調して行くことが必要である。そのため、抽象的思考力を向上させる学習とする。その際に、情報リテラシー(情報読解力、情報判断力、

情報発信・交流力)を用いて考察を行う。

ア グローバルなスケールでとらえる地球社会

④ 空間的相互依存作用

・世界の社会・経済システム

(多国籍企業, フードシステムとアグリビジネス)

イ グローバルなスケールとローカルなスケールでとらえる地球社会

⑤ 地域

・日本の位置と領域, 国家間の結び付き

◇ 内容の取り扱い

(1) 内容の全体にわたって, 次の事項に配慮するものとする。

ア グローバルなスケールとローカルなスケールという2つの視点を重視した学習とすること。

イ 地理的思考(空間的思考)を基礎としながら現代的課題を解決する地理的知識や技能の応用を重視すること。

ウ 異文化理解, 環境, 開発, 防災, 平和等の地球的課題に関わる諸領域を包摂した総合的な教育を行うこと。

エ 地誌的学習を軸に, 系統地理的な知識や見方を活用するとともに, 現代世界及び地域の諸課題に興味を持てるような主題学習を, 相互に関連付けた学習(相互展開学習)とすること。

オ 持続可能な社会の担い手を育む観点から地球社会に対する関心を深める内容を取り入れ, 現代世界と地域社会を関連させて考察しやすい学習とすること。

カ 地域調査や地図の読み取り等に加え, GISを活用し, 抽象的思考力を向上させるために, 地理的思考(空間的思考)を基礎としながら, 情報リテラシーを用い, 地球社会的課題に主体的に取り組む学習とすること。その際, 教科用図書「地図」を十分に活用するとともに, 地図や統計などの地理情報の収集・分析には, 情報通信ネットワークや地理情報システム等の活用を工夫すること。

キ 地図を有効に活用して事象を説明したり, 自分の解釈を加えて論述したり, 討論したりするなどの活動を充実させること。

ク 学習過程において政治, 経済, 生物, 地学的な事象等も必要に応じて扱うことができるが, それらは空間的な傾向性や諸地域の特色を理解するのに必要な程度とすること。

ケ 各項目の内容に応じて日本を含めて扱うとともに, 日本と比較し関連付けて考察させること。

(2) 主題を設定して行う学習については, 次の事項に配慮するものとする。

ア 学習の実施に当たっては, 適切な時間を確保し, 年間指導計画の中に位置付けて指導すること。また, 主題の設定や資料の選択に際しては, 生徒の興味・関心や学校, 地域の実態等に十分配慮して行うこと。

イ 国際理解, 環境, 多文化共生, 人権, 平和, 防災等, 個別分野に関する教育等, ESDとの関係からも主題を設定すること。

ウ 地理的技能の育成を図るため, 地図の読図や作図等を主とした作業的, 体験的な学習を取り入れるとともに, グループ学習や討論等の言語活動を用いた学習方法の積極的な活用を図ること。

※ 以下に示す「指導と評価の一体化（到達目標）」については『地理教育国際憲章』（国際地理学連合・地理教育委員会編 1992.8）を参考にしており、今後検証を重ね、改訂を行う。

◇ 指導と評価の一体化（到達目標）

(1) 地理的知識の習得と理解の深化に関する到達目標

ア 国家的あるいは国際的なできごとを地理的視野におき、基本的な空間的相互依存関係を理解するための位置と場所の特徴に関する知識と理解。

イ 生態系内部のあるいは生態系間の相互依存作用を理解するための地表面の主要な自然現象（例えば、地形、土壌、水、気候、植生等）に関する知識と理解。

ウ 場所の特質を読み取る方法（場所に対する地理的センス）を習得するための地表面の主要な社会・経済的システム（農業、集落、運輸、工業、貿易、エネルギー、人口等）に関する知識と理解。

※ 場所に対する地理的センス

① 人間の諸活動に対する自然的諸営力の関係を理解できること

② 多様な文化的価値観、信仰、技術的、経済的、政治的システムに伴う持続可能な環境改変のための多様な方法を理解できること

エ 人類のもつ文化遺産を尊重するために必要な、世界の人々と社会の多様性に関する知識と理解。

オ 日常の行動空間としての郷土や国土の構造並びに形成過程に関する知識と理解。

カ 地球的規模での相互依存のための取組と相互依存の機会に関する知識と理解。

(2) 地理的技能の到達目標

ア 記述的説明、計量手法、解説、写真、グラフ、表、構造図、地図等の活用。

イ 野外観察、測量、面接調査、二次資料の分析、統計資料等の各種技法

ウ 現代世界から地球社会における、グローバルなスケール及びローカルなスケールでの、地理的課題を発見するための意思疎通、思考、実践的・社会的技能の活用。

※ ① 課題や論点の明確化      ② 情報の収集と構造化      ③ データの処理

④ データの解釈      ⑤ データの評価      ⑥ 一般化

⑦ 判定      ⑧ 意思決定（価値判断）      ⑨ 問題解決

⑩ グループでの共同活動      ⑪ 明確な態度による首尾一貫した行動

(3) 態度並びに価値形成のための到達目標

ア 身の周り、あるいは地表面の多様な自然と人間活動との関係への強い関心を示すこと。

イ 自然界の美しさ、他方では人々の多様な生活状態の正しい認識ができること。

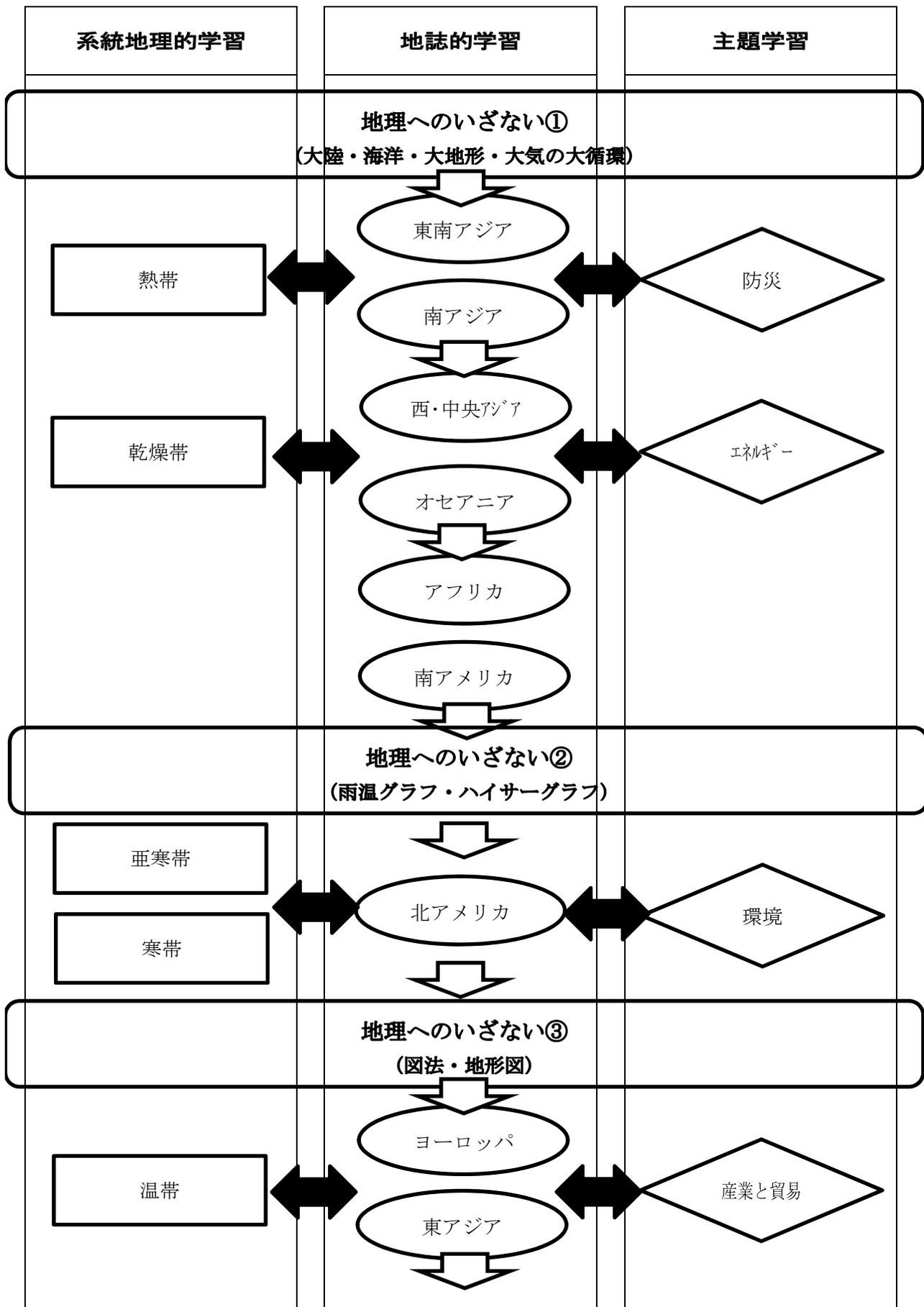
ウ 次世代のための環境並びに人間居住の質とその保全計画に関心を抱くこと。

エ 意思決定における態度や持続可能的価値観の理解が十分にできること。

オ 私生活、職業生活、社会生活において、適切に、かつ責任をもって地理的知識と技能の応用が素早くできること。

カ 人々の平等な権利を尊重し、地域社会的、地方的、国家的、また、国際的な諸問題の解決に貢献できること。

(2) 「地理基礎」概念図について



### (3) 「歴史基礎」の内容構成

◇ 単位数 2単位

◇ 目標

世界と日本の歴史的展開について、諸資料に基づき、地理的条件と関連付けながら一体的に理解させるとともに、現代世界の諸課題について歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

◇ 内容

#### (1) 地域世界と日本

人類が各地に諸文明を築き上げ、それらを基により大きな地域世界が形成され、さらに活発な交流により地域世界が再編される過程で生じた歴史的展開について、各項目への「問」を通して理解させる。

ア 原生人と自然現生人類の長い旅：人類はいつどこで誕生し、世界に広がったか。

イ 文明と国家の誕生：なぜ文明が生まれ、「神聖」な王が誕生したか。

ウ 身分と宗教（前近代に生きる）：なぜ身分が生まれ、「領主」が誕生したか。

エ 章扉「世界遺産を調べよう」及び項目ごとの「主題学習」を通して、探究的学習を行う。

#### (2) 世界の一体化と日本

16世紀以降の世界商業の進展及び資本主義の確立を中心に、世界が一体化に向かう過程で生じた歴史的展開について、各項目への「問」を通して理解させる。その際、世界の動向と日本とのかかわりに着目させる。

ア 西洋と非西洋の遭遇：西洋・非西洋世界が遭遇した時にどんなことが生じたか。

イ 近代の成立：近代とは何か。政治と経済の仕組みはどう変わったか。

ウ 近代西洋とアジア：アジアの人々は西洋の動きにどう対応したか。

エ 明治の日本と東アジア：近代化を進める日本が、アジアに対して取った行動とは。

オ 章扉「災害と復興を考える」及び項目ごとの「主題学習」を通して、探究的学習を行う。

#### (3) グローバル化した世界と日本

19世紀末以降の高度資本主義社会の出現、世界大戦及び冷戦期を中心に、グローバル化した世界が形成される過程で生じた歴史的展開について、各項目への「問」を通して理解させる。その際、世界の動向と日本とのかかわりに着目させる。

ア 現代の始まりと第一次世界大戦：現代とは。第一次大戦で世界はどう変わったか。

イ 第二次世界大戦への道：大戦はなぜ再び始まり、世界にどんな影響を与えたか。

ウ 大日本帝国崩壊と戦後改革：大日本帝国が崩壊後、日本はどのように再建されたか。

エ 冷戦の時代：米ソ冷戦はどのように始まり、どんな影響を及ぼしたか。

オ 非西洋諸国の動向：非西洋諸国は、国際社会の中でどのような位置を占めたか。

カ 情報革命とポスト冷戦：冷戦後、国際政治の枠組みはどのように変容したか。

キ 章扉「地域の中に世界を発見しよう」及び項目ごとの「主題学習」を通して、探究的学習を行う。

◇ 内容の取扱い

(1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。

ア 高等学校歴史教育における世界史と日本史の分断状況を克服し、中学校での歴史学習を踏まえつつ、世界史と日本史を融合したグローバルな歴史学習とすること。

イ 歴史的思考（時系列的思考）を基礎としながら，近代以降の歴史に比重を置きつつ，東アジアと日本の関係を重視した歴史学習とすること。

ウ 科目の目標に即して基本的な事項・事柄・概念を精選し，歴史的な概念理解に向けた指導内容を構成するとともに，各時代における世界と日本を関連付けて扱う。また，「人と自然」「人と社会」「世界と地域」の視点から考察を行うことで，地理的条件とも関連付けるようにすること。

エ 年表，地図その他の資料を積極的に活用したり，文化遺産，博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりなどして，具体的に学ばせるように工夫すること。

オ 歴史的な視点から，現代的課題の認識や異文化理解を深め，自国理解と国際協調の精神を養うこと。

(2) 各項目については，次の事項に配慮するものとする。

ア 内容の(1)については，世界諸地域の文化や生活の独自性・主体性及び相互の関連性を重視した学習とすること。

イ 内容の(3)については，単に知識を与えるだけでなく，現代世界が当面する課題について国際社会に主体的に生きる日本国民としての意識をもって考察させること。

(3) 主題を設定して行う学習については，次の事項に配慮するものとする。

ア 学習の実施に当たっては，適切な時間を確保し，年間指導計画の中に位置付けて指導すること。また，主題の設定や資料の選択に際しては，生徒の興味・関心や学校，地域の実態等に十分配慮して行うこと。

イ 世界遺産学習等，E S Dとの関係からも主題を設定すること。

ウ 歴史的思考力の育成を図るため，資料調査・解説の方法，グループ研究・発表，歴史の解釈・評価・討論等，言語活動を用いた学習方法の積極的な活用を図ること。

(4) 近現代史の指導に当たっては，次の事項に配慮するものとする。

ア 客観的かつ公正な資料に基づいて歴史の事実に関する理解を得させるようにすること。

イ 政治，経済，社会，文化，宗教，生活等，様々な観点から歴史的事象を取り上げ，近現代世界に対する多角的で柔軟な見方を養うこと。

※ 以下に示す「指導と評価の一体化（到達目標）」については、今後検証を重ね、改訂を行う。

◇ 指導と評価の一体化（到達目標）

(1) 歴史的知識の習得と理解の進化に関する到達目標

ア 諸地域世界の形成過程における基本的な事項・事柄・概念の知識と理解。

イ ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景とした諸地域世界の交流と、新たな諸地域世界の形成や再編における基本的な事項・事柄・概念の知識と理解。

ウ 16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程における基本的な事項・事柄・概念の知識と理解。

エ 現代世界に関する特色や当面する課題等、基本的な事項・事柄・概念の知識と理解。

(2) 歴史的技能の到達目標

ア 論述の説明，計量的手法，解説，諸資料の収集・読み取り，地図・その他の資料等の活用。

イ 文化遺産，博物館や資料館の調査・見学，面接調査，二次資料の分析，年表化・図表化などの各種技法。

ウ 地域世界から世界の一体化，グローバル化した世界に及ぶ様々なスケールでの，歴史的課題を発見するための意思疎通，思考，実践的・社会的技能の活用。

- ※ ① 課題や論点の明確化      ② 情報の収集と構造化      ③ データの処理  
④ データの解釈              ⑤ データの評価              ⑥ 一般化  
⑦ 判定                          ⑧ 意思決定（価値判断）      ⑨ 問題解決  
⑩ グループでの共同活動      ⑪ 明確な態度による首尾一貫した行動

(3) 態度並びに価値形成のための到達目標

ア 人類が自然環境に適応しながら築き上げた諸文明及び諸地域世界に対する強い関心を示すこと。

イ ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景とした諸地域世界の交流と，新たな諸地域世界の形成や再編に対する強い関心を抱くこと。

ウ 16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程に対する正しい認識ができること。

エ 現代世界に対する関心と課題意識を高め，歴史的観点から探究し，21世紀の世界についての諸課題の解決に貢献できること。

(4) 「歴史基礎」単元構成素案について

① 構成の視点

視点 1	目標	市民的基礎教養としての歴史，「単元史学習」とする。
視点 2	歴史像の構成	日本史と世界史を統合した時系列史の枠組みを基本に置く。「人と自然」「人と社会」「世界と地域」の観点から編成すると共に，近現代史学習や東アジア史学習を重視し，現在の諸問題を歴史上の長期的視点からとらえられるよう工夫する。
視点 3	単元の構成	<p>「序」を除き，1単元を4～6時間で構成し，13の単元史（計60時間）として構成する。</p> <p>1単元中3～5時間を，教師の「説明・発問」及び生徒の「探究的学習」を併せた方式で行う。</p> <p>2単元中1時間相当分を，「主題学習」とし，探究的学習を主軸として展開する。</p>
視点 4	主題学習の方法	<p>主題学習は探究的学習による歴史的思考力の育成を主眼とし，一例として以下の展開を予定している。</p> <p>① 事前にテーマ（案）を提示し，担当者（または担当グループ），テーマ，発表日等を決める。</p> <p>② 担当者（または担当グループ）が資料等を調査・分析し，内容を発表する。</p> <p>③ 課題をまとめたうえで，参加者による質疑・討論を行う。</p> <p>④ 主題学習の展開に当たっては，協同学習の手法を取り入れる。</p>
視点 5	教育課程上の位置	<p>中学で学んだ基本的知識を活用すると共に，単元ごとの設ける中心「概念」を学ぶことで，歴史についてより深く考えさせる。また，体系的な歴史学習となる選択科目「日本史B」「世界史B」の履修につなげると共に，「地理基礎」及び地理学習との連携を図る。</p>

② 内容構成

	単元テーマ	時	授業及び主題学習の「テーマ」	強調	中心「概念」	地域等				
						世界全般	西洋	中東他	東アフリカ	日本
	内容上の「問」		※実際の授業テーマ(及び主題)は、より具体化して実施							
I	地域世界と日本									
人と社会	世界遺産を調べよう		1世界遺産とはなにか? 2世界遺産を調べよう							
テーマ1.	現生人類の長い旅									
	人類はいつどこで誕生し、世界に広がったのか?	1	人類の誕生と淘汰	自然	旧石器文化, 獲得経済	○		◎		
		2	人類の広がりとは農業・牧畜	自然	農業革命, 生産経済	◎		○	○	
		3	日本列島の人類	自然	新旧石器, 金属器文化				○	◎
主題		①なぜ、現生人類に異なる文化が生まれたのか? ②縄文人と弥生人の違いは何か?	自然	人種, 言語, (年代測定法)	◎			○	◎	
テーマ2.	文明と国家の誕生									
	なぜ文明が生まれ、「神聖」な王が誕生したのか?	1	「神聖なる王」の誕生(オリエント)	自然	文明, 神権政治, 古代国家			◎		
		2	ギリシャとローマ		民主制, 都市国家, 帝国		◎	○		
		3	皇帝と冊封関係(中国・東アジア)		国王と皇帝, 冊封関係				◎	○
		4	世界の東西交易	G&L	東西交易(路), 都市	◎		○	◎	
主題		①日本の都市はいつ誕生したかー弥生・古墳・飛鳥・奈良 ②暦はどのようにして誕生したのか? ③漢字はどのように誕生し、どこに広がったのか?	G&L	文明, 都市の成立 都城制, 租税・労役	○	○		○	◎	
テーマ3.	身分と宗教(前近代に生きる)									
	なぜ身分が生まれ、「領主」が誕生したのか?	1	身分共同体に生きる人々(都市と農村)	自然	身分制, 社会的分業		○			◎
		2	武人政権と封建制(東アジア中心)		封建制, 武人政権, 荘園制				○	◎
		3	モンゴル帝国の時代	G&L	異民族支配, 東西交易			○	◎	○
		4	環東シナ海交易圏と港町	G&L	地域交易圏, 貨幣経済				◎	◎
主題		①仏教はなぜアジアに広がることのできたのか? ②ユダヤ教, キリスト教, イスラム教の関係?		世界宗教 一神教・多神教	◎	○	○	○	○	
II	世界の一体化と日本									
人と自然	災害と復興を考える		①人類に及ぼした災害とは? 飢饉, 地震, 大火・・・ ②どう復興した(しなかった)のか?							
テーマ4.	西洋と非西洋の遭遇									
	西洋・非西洋世界が遭遇した時、どんなことが生じたのか?	1	非西洋の帝国(オスマン, ムガル, 明・清)		専制国家, アジア交易			○	◎	
		2	西洋の「大航海時代」	自然	宗教改革, 軍事革命		◎			
		3	西洋・非西洋文明の遭遇	G&L	世界史の一体化		○	◎	◎	○
		4	江戸幕府の「鎖国」政策		鎖国体制, 幕藩体制				○	◎
主題		①キリスト教は各地でどう受容・反発されたか? ②世界史における銀の果たした役割とは? ③世界交易(商品)がもたらした功罪? ※絵地図。絵巻物?	G&L	植民地, 主権国家, 世界的布教, 重商主義	◎	○		○	○	

単元テーマ	時	授業及び主題学習の「テーマ」	強調	中心「概念」	地域等					
テーマ5. 近代とは?政治と経済の仕組みはどう変わったのか?	近代の成立									
	1	大西洋交易と商業革命	G&L	商業革命, 奴隷, 三角貿易	○	◎	○			
	2	イギリスの産業革命と社会問題	自然	工業化, 労働・社会問題		◎	○			
	3	英仏の覇権競争とアメリカの独立革命		植民地争奪, 人民主権		◎				
	4	フランス革命とその影響		民主制, 基本的人権		◎				
	5	自由主義とナショナリズム		自由主義, 国民国家	○	◎				
主題		①近代以降, 人々の働く姿は どう変化したのか? ②市民革命の前後で何が変わったのか? ③資本主義体制は, なぜ世界に 広がったのか?	G&L	基本的人権, 民主主義, 資本主義, 労働者, 労働問題	○	◎				
テーマ6. アジアの人々は西洋の動きにどう対応したか?	近代西洋とアジア									
	1	インド大反乱と植民地化		植民地化, モノカルチャー		○	◎			
	2	清国とイギリス	G&L	不平等条約, 三角貿易		○		◎		
	3	開国から明治維新へ		アジアの近代, 文明開化		○				◎
	4	国境の策定と琉球・蝦夷地の 変化		国民国家と国境					○	◎
主題		①世界と日本を同時に見た 人物を調べてみよう ②日本は西洋文明と伝統を どう結びつけたのか? ③「円」はなぜ生まれたのか, またどう広がったのか?	G&L	近代の発見, 近代の受容, 教育の義務化	○	○		○	◎	
テーマ7. 近代化を進める日本が, アジアに対しとった 行動とは?	明治の日本と 東アジア									
	1	中国・韓国の近代化への模索		アジアと近代, 洋務運動				◎	○	
	2	日本の産業革命 (阪神工業地帯の成立)		日本資本主義, 地主制		○		○	◎	
	3	世界史の中の日露戦争	G&L	帝国主義世界, 国家主義	○	○		○	◎	
	4	韓国併合とアジア		義兵運動, 三民主義				◎	○	
主題		①日本はロシアとの戦争を なぜ遂行できたのか? ②神戸港はどのように成立し, どんな役割を果たした? ③翻訳語はどのように成立し, どう広がったのか?	G&L	金融資本, 港湾都市, 民族運動		○	○	○	◎	
III	グローバル化した 世界と日本									
世界と 地域	地域の中に世界を 発見しよう									
テーマ8. 現代とは?第一次大戦 で世界はどう変わった のか?	現代の始まりと 第一次世界大戦									
	1	植民地分割と移民の時代	G&L	植民地分割, 移民	◎	◎	○	○	○	
	2	総力戦としての第一次大戦	G&L	総力戦, 動員, 民族主義	◎	◎	○	○	○	
	3	ロシア革命とベルサイユ条約		社会主義, 国際機関	○	◎	○	○	○	
	4	民族運動とワシントン条約		民族自決, 国際協調	◎	○		○	○	
	5	大量生産・消費, 大衆社会の 到来(アメリカ)	自然	高度資本主義, 大衆社会		◎				○
主題		①女性参政権はどのように 広がったのか? ②国際協調路線の「光と影」に ついて考えてみよう ③メディアは, 世界でどのよう に発展したか?	G&L	総力戦, 国際協調, 軍縮, 女性解放, 社会民主主義	◎	◎		○	○	

	単元テーマ	時	授業及び主題学習の「テーマ」	強調	中心「概念」	地域等				
テーマ9.	第二次世界大戦への道									
	大戦はなぜ再び始まり、世界にどんな影響を与えたのだろうか？	1	大恐慌と全体主義国家の台頭	G&L	恐慌, 全体主義	◎	◎			○
		2	日中15年戦争の開始		軍国主義, 戦時体制	○			◎	◎
		3	アジア・太平洋戦争	G&L	国家総動員, 皇民化	○	◎		◎	◎
		4	第二次世界大戦の終結	G&L	世界大戦, 国際法	◎	○	○	○	○
主題		①なぜファシズムが台頭したのだろうか？ ②日本の終戦を, 世界の資料を読んで考えよう ③第一次大戦と第二次大戦を比較してみよう	G&L	ファシズム, 宣伝戦, 非戦闘員の犠牲, 原爆投下	◎	○	○	○	◎	
テーマ10.	大日本帝国崩壊と戦後改革									
	大日本帝国が崩壊後、日本はどのように再建されたのか？	1	戦後世界体制の成立	G&L	国連, 貿易自由化	◎	○			
		2	占領下での民主化		占領政策, 民主化	○	○			◎
		3	サンフランシスコ講和と国際連合加盟	G&L	国民主権, 平和主義	○	○		○	◎
		4	帝国解体と中国・台湾・朝鮮		サンフランシスコ講和				◎	◎
主題		①女性からみた占領改革とは？ ②沖縄の戦後史を調べよう ※学校教育？		女性参政権, 平和主義と冷戦構造				○	◎	
テーマ11.	冷戦の時代									
	米ソ冷戦はどのように始まり、どんな影響を及ぼしたのか？	1	冷戦の開始と55年体制	G&L	東西冷戦, 戦後政治	◎	○		○	◎
		2	アジアの戦争と日本の復興	G&L	核戦争の危機, 局地戦争	○	○		◎	○
		3	高度経済成長の時代		高度成長, 消費革命, 公害					◎
		4	冷戦下の中東諸国		中東紛争, 石油危機		○	◎		
主題		①社会主義の存在が資本主義国に与えた影響とは？ ②「分断」国家の歴史について調べてみよう	G&L	条約機構, 分断国家, 福祉国家	◎	○		○	○	
テーマ12.	非西洋諸国の動向									
	非西洋諸国は、国際社会の中でどのような位置を占めたのか？	1	独立(アジア・アフリカ)の時代		南北問題, 第三世界	○		◎		
		2	日韓基本条約と日中国交回復		戦後処理, 開発独裁				◎	◎
		3	経済成長する非西洋諸国と「改革・開放」の中国		資源分配, 所得分配			◎	◎	
主題		①植民地からの独立後も紛争が続くのは？ ②韓国が経済成長を遂げたのはなぜ？	G&L	民族紛争, 新興工業国, 貿易収支, 多国籍企業			○	◎		
テーマ13.	情報革命とポスト冷戦									
	冷戦後、国際政治の枠組みはどのように変容したのか？	1	ソ連の解体と超大国アメリカ	G&L	緊張緩和, ビロード革命	◎	◎			
		2	地域統合と民族紛争		地域統合, 民族紛争	○	◎	○		
		3	情報革命とグローバル化	G&L	IT革命, グローバル化	◎	○	○	○	○
主題		①冷戦後に、各地で民族紛争が起きたのは？ ②21世紀に求められている新しい国際協力？	G&L	地域統合, 民族紛争, 国際協力, 地球環境破壊	◎	○	○	○	○	

## IV 実施の効果

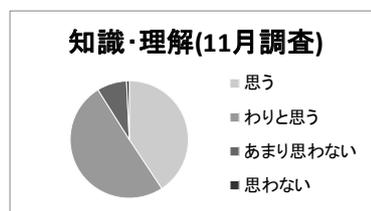
# 1 教育課程内容の検証

## (1) 中学校の社会科と比較して

中学校の社会科の授業と比較するために、4月に中学校の社会科の授業に関する調査と11月に中学校の社会科と高等学校の地理基礎、歴史基礎の授業を比較した調査を行った。

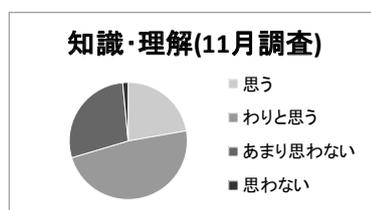
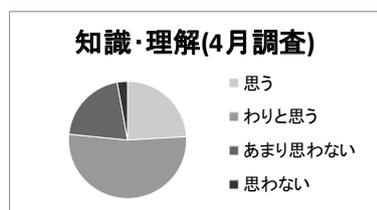
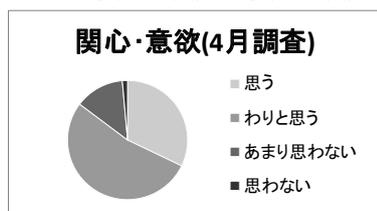
### ① 地理的分野と地理基礎の比較

4月調査（中学校について）					11月調査（高校について）						
地理的分野への感想					地理基礎への感想						
		関心・意欲・態度		知識・理解				関心・意欲・態度		知識・理解	
		授業に興味を持てた		授業内容が理解できた				授業に興味を持てた		授業内容が理解できた	
4	思う	36	25.4	30	21.3	58	43.0	55	40.7		
3	わりと思う	76	53.5	86	61.0	66	48.9	68	50.4		
2	あまり思わない	27	19.0	22	15.6	9	6.7	11	8.1		
1	思わない	3	2.1	3	2.1	2	1.5	1	0.7		
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)		



### ② 歴史的分野と歴史基礎の比較

4月調査（中学校について）					11月調査（高校について）						
歴史的分野への感想					歴史基礎への感想						
		関心・意欲・態度		知識・理解				関心・意欲・態度		知識・理解	
		授業に興味を持てた		授業内容が理解できた				授業に興味を持てた		授業内容が理解できた	
4	思う	46	32.2	34	24.1	45	33.3	30	22.2		
3	わりと思う	76	53.1	74	52.5	70	51.9	65	48.1		
2	あまり思わない	19	13.3	29	20.6	20	14.8	38	28.1		
1	思わない	2	1.4	4	2.8	0	0.0	2	1.5		
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)		



地理基礎については、中学校の地理的分野より、地理基礎の授業を受けることで、「関心・意欲・態度」「知識・理解」のどちらも高まったことがわかる。生徒の意識変化については、多面的に分析する必要があるが、地理基礎については、概ね生徒の発達段階に応じた、適切な教育課程の内容が提示できたといえる。また、中高一貫校の特性を活かし、中学校段階で学習したことを踏まえつつも、できる限り学習内容の重複を避けたことが、高い評価につながったと考えられる。

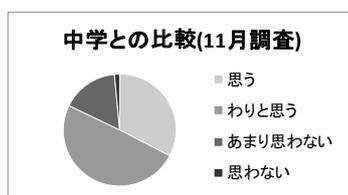
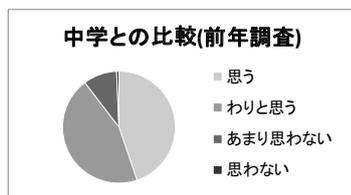
歴史基礎については、ほぼ変化がない状況であった。生徒の意識変化については、多面的に分析する必要があるが、全体プランの策定が遅れ、歴史基礎としては部分的な実践に終わったことなどが影響していると考えられる。

## (2) 地理基礎, 歴史基礎実施前と比較して

地理基礎, 歴史基礎実施前と比較して, 前年度末に中学校の社会科の授業と地理A, 世界史Aの授業を比較したアンケートを, 11月に中学校の社会科の授業と地理基礎, 歴史基礎の授業を比較した調査を行った。

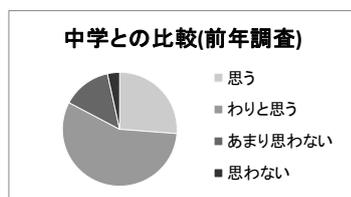
### ① 地理基礎実施前との比較

	前年度調査 (中学校について)		11月調査 (中学校について)	
	地理A		地理基礎	
	中学校との比較		中学校との比較	
	詳しく知ることができて、 興味を持てた。		詳しく知ることができて、 興味を持てた。	
4 思う	65	44.8	44	32.6
3 わりと思う	65	44.8	67	49.6
2 あまり思わない	14	9.7	22	16.3
1 思わない	1	0.7	2	1.5
	(人)	(%)	(人)	(%)



### ② 歴史基礎実施前との比較

	前年度調査 (中学校について)		11月調査 (中学校について)	
	世界史A		歴史基礎	
	中学校との比較		中学校との比較	
	詳しく知ることができて、 興味を持てた。		詳しく知ることができて、 興味を持てた。	
4 思う	38	26.2	35	25.9
3 わりと思う	82	56.6	58	43.0
2 あまり思わない	20	13.8	39	28.9
1 思わない	5	3.4	3	2.2
	(人)	(%)	(人)	(%)



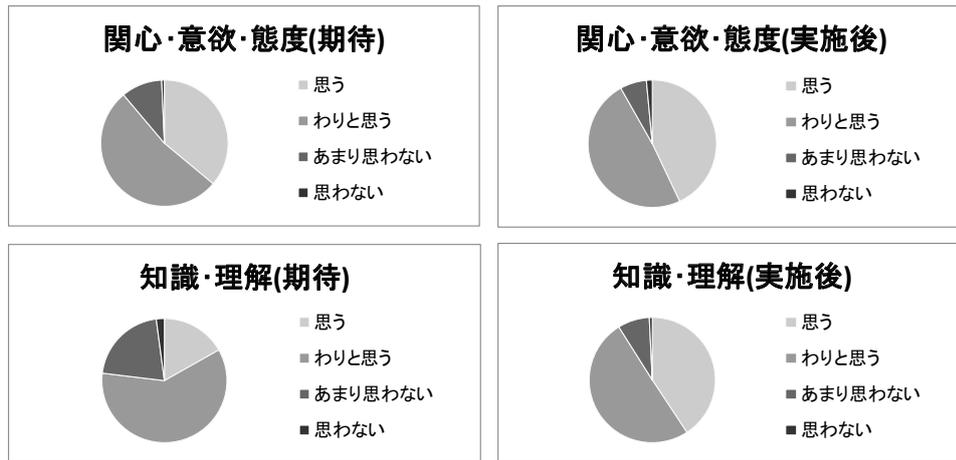
地理基礎についても, 歴史基礎についても, 地理A, 世界史A実施時より, 数値は下がっている。これは, 地理A, 世界史A実施時は1人の教員で学年全クラスの授業を担当しており, 複数の教員で担当している地理基礎, 歴史基礎より, 数値が高く出たと考えられる。ただし, 数値自体は低いわけではなく, とともに70%以上の生徒が中学校の社会科より, 詳しく知ることができ, 興味も高まったと回答していることから, 一定の成果が出たことが分かる。複数の教員で担当していても, 高い数値を示したことで, 全国で展開される際の一般的な実施形態において, 地理基礎, 歴史基礎が中学校の社会科より, 学習内容, 学習方法について, 生徒の成長に応じた適切な学習を提供できたことが証明された。

(3) 関心・意欲・態度, 知識・理解について

教育課程の内容について確認するために、4月に地理基礎, 歴史基礎の授業への期待する気持ちと、11月に地理基礎, 歴史基礎の授業を受けた後の感想を比較する調査を行った。

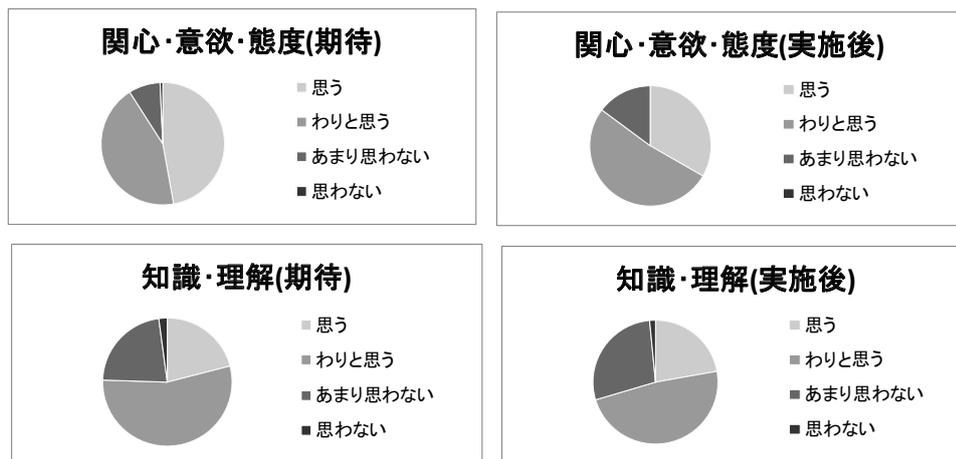
① 授業開始前の期待する気持ちとの比較 (地理基礎)

		4月調査 (期待する気持ち)		11月調査 (実施後の感想)	
		関心・意欲・態度		知識・理解	
		授業に興味がある		授業内容が理解できそうだ	
		(人)	(%)	(人)	(%)
4	思う	52	36.1	24	16.8
3	わりと思う	76	52.8	86	60.1
2	あまり思わない	15	10.4	30	21.0
1	思わない	1	0.7	3	2.1



② 授業開始前の期待する気持ちとの比較 (歴史基礎)

		4月調査 (期待する気持ち)		11月調査 (実施後の感想)	
		関心・意欲・態度		知識・理解	
		授業に興味がある		授業内容が理解できた	
		(人)	(%)	(人)	(%)
4	思う	68	47.2	30	21.0
3	わりと思う	63	43.8	78	54.5
2	あまり思わない	12	8.3	32	22.4
1	思わない	1	0.7	3	2.1



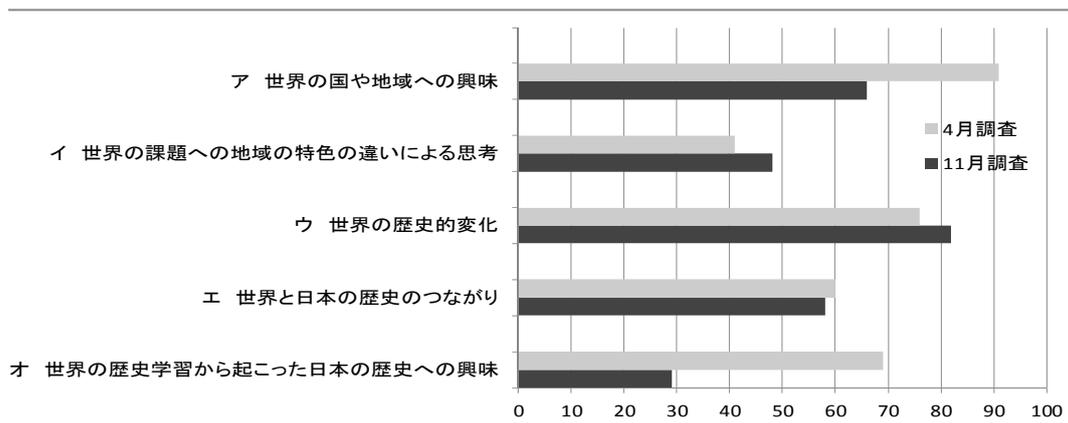
地理基礎については、「関心・意欲・態度」「知識・理解」とも、4月調査結果を上回る数値となった。試行期間でありながら、単元構成を、地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用し、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連づけて学習する「相互展開学習」とした成果が出た結果となった。

歴史基礎については、「関心・意欲・態度」「知識・理解」とも、4月調査結果を下回る数値か同程度の数値となった。世界史と日本史を融合するために、学習内容を精選し、構成した効果がみられる一方で、全体プランの策定が遅れ、部分的な実践に終わったことなどが影響していると考えられる。次年度の本格的な実施に向け、より生徒の学習に効果的な内容構成の作成を目指したい。

#### (4) 学習項目について

教育課程の内容について確認するために、学習項目についての調査を行った。4月の調査は身に付きたい学習項目であり、11月の調査は身に付いた学習項目である。(複数回答可)

		4月調査		11月調査		前年度末調査	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
ア	世界の国や地域への興味	91	63.2	66	48.9	90	63.4
イ	世界の課題への地域の特色の違いによる思考	41	28.5	48	35.6	52	36.6
ウ	世界の歴史的变化	76	52.8	82	60.7	76	53.5
エ	世界と日本の歴史のつながり	60	41.7	58	43.0	51	35.9
オ	世界の歴史学習から起こった日本の歴史への興味	69	47.9	29	21.5	27	19.0
カ	グローバル化した社会への、参画の意思			28	20.7	37	26.1
キ	地理とともに歴史の授業を学ぶ事の有用性			44	32.6	66	46.5

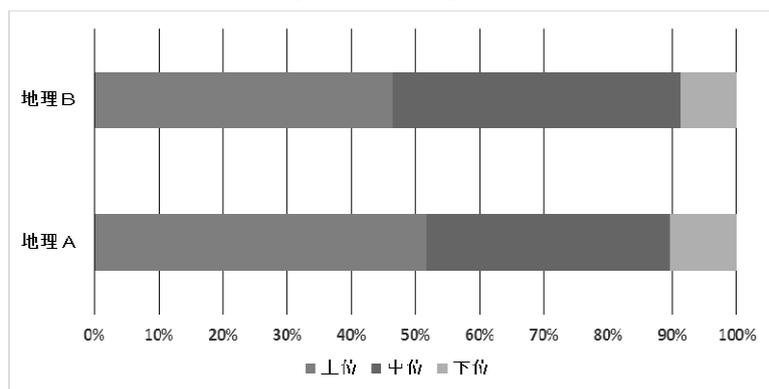


「イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考」と「ウ 世界の歴史的变化」は4月当初の期待より定着した実感が高い。地理基礎においては主題学習を積極的に取り入れ、歴史基礎においては丁寧な単元構成を行い、思考・判断・表現の機会を多く設けた成果となった。しかし、もっとも期待が高かった「ア 世界の国や地域への興味」については、定着した実感が低い結果となった。本項目は、「グローバルな時空間認識」にとって、最も基礎となる項目である。今後、地理基礎でさらに多くの地域の学習した後、再検討したい。また、「エ 世界と日本の歴史のつながり」と「オ 世界の歴史学習から起こった日本の歴史への興味」の結果は、歴史基礎で、世界と日本のつながりは理解したものの、世界史の中に日本史を適切に位置づけ、興味から探究へと深化させるまでには至っていないことを表わしており、世界と日本のつながりを意識させるだけに留まらない授業内容の設定、展開の工夫が求められている。

#### (5) 地理基礎「相互展開学習」について

地理基礎は地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用し、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連付けて学習する「相互展開学習」(2単位科目)とした。今年度試行した結果を「相互展開学習」で学習しなかった学年と比較した。

図1 同一問題による学年間比較



定期考査問題で、地理基礎を試行実施した第4学年(高1)と実施していない第5学年(高2)について、同一問題(35点配点)で比較した。その結果第4学年の平均得点率が64.2%,5学年が62.2%となった。また、図1から、試行実施した第4学年が第5学年に比べて上位者層が多い結果となり、「相互展開学習」の効果が見られた。

#### (6) 歴史基礎「単元史学習」について

歴史基礎では、世界史Aの枠組みの中で一部試行を行った。協同学習を活用した主題学習を展開するなど、試行錯誤を重ねた結果、「単元史学習」というスタイルで行うことが適切との判断にたどり着いた。「単元史学習」では、世界史と日本史を融合した「単元」を時系列的に編成し、「単元」としての「問」を立てるとともに、「問」に基づいた授業及び主題学習を展開することで、歴史的思考力を深めることが企図されている。

#### (7) 授業時間等についての工夫

地理基礎については、年度当初に教育計画を作成し、科目を担当する教員間で定期的に打ち合わせを持つなど、計画的に試行した。

歴史基礎については、次年度の本格実施に向け、教育計画を作成し、一部試行することができた。その結果、両科目とも2単位での実施に合わせた、単元構成の素案を作ることができた。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

#### ① 「地理基礎」について

指導方法等の前提として、生徒の探究的学習におけるテーマ設定にあたっては、地理的思考(空間的思考)を基礎としながら、地球社会的課題に主体的に取り組みやすい内容を取り上げ、地理的な見方や考え方の育成に努めた。また、持続可能な社会の担い手を育む観点から地球社会に対する関心を深めるテーマを取り入れ、現代世界と地域社会を関連させて考察しやすい構成とした。しかし、個々のテーマ設定の水準については課題を残した。

また、学習方法として、単元末のみならず、単元の途中にも主題学習を取り入れた。本校で「情報リテラシー(情報読解力、情報判断力、情報発信・交流力)」をテーマにした教材開発を行ってきた経験を踏まえ、資料活用や地図の読み取りなどを積極的に行うとともに、地理情報システム(GIS)を活用した。

さらに、本校の前身である附属住吉中学校で伝統的に実施してきた「協同学習」を、後期課程にも

適用した。具体的には、基本的に4人1組のグループで活動し、各自の役割分担を明確にするとともに、個々人に違う資料を配付するなど、一人一人の責任と価値判断が明確になるように努めた。また、個人思考からグループ活動、学級全体での思考の可視化、個人の振り返りの過程を通して、個人の取り組みが全体に活かされる指導を試みた。

## ② 「歴史基礎」について

指導方法等の前提として、生徒の探究的学習におけるテーマ設定にあたっては、歴史的思考（時間的思考）を基礎としながら、現代世界の諸課題を理解し、課題解決の糸口となるように、類似の歴史事象を積極的に取り上げて歴史的思考力の育成に努めた。また、自国理解と国際協調の精神を養うことを重要な目標として、諸地域の文化や生活の独自性・主体性を尊重して異文化理解に努めるよう構成した。

また、学習方法として、本校で「情報リテラシー（情報読解力、情報判断力、情報発信・交流力）」をテーマにした教材開発を行ってきた経験を踏まえ、古地図、絵巻物等の絵画資料、文字資料等の諸資料を使って読み取りを行い、解釈・評価・討論等の言語活動を積極的に行うとともに、技能面での強化に取り組んだ。

さらに、「地理基礎」と同様に「協同学習」を適用したが、歴史における知識量の多さとその扱いに苦慮したことに加え、「歴史基礎」の全体像構想の完成に時間を費やしたこともあり、地理基礎に比べて部分的な展開にとどまった。

したがって、「歴史への興味関心」「歴史的資料の調査力」「歴史的分析・解釈力」「時系列的思考力」の育成等の指導方法論を、各視点別に構成するなどの点で課題を残した。

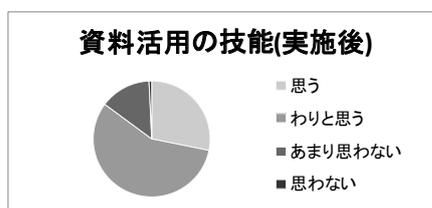
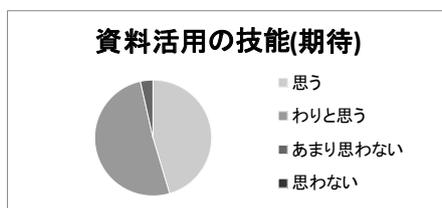
## (2) 指導方法等の検証

### (2) - 1 思考・判断・表現、資料活用の技能について

指導方法について確認するために、4月に地理基礎、歴史基礎の授業への期待する気持ちと、11月に地理基礎、歴史基礎の授業を受けた後の感想を比較する調査を行った。

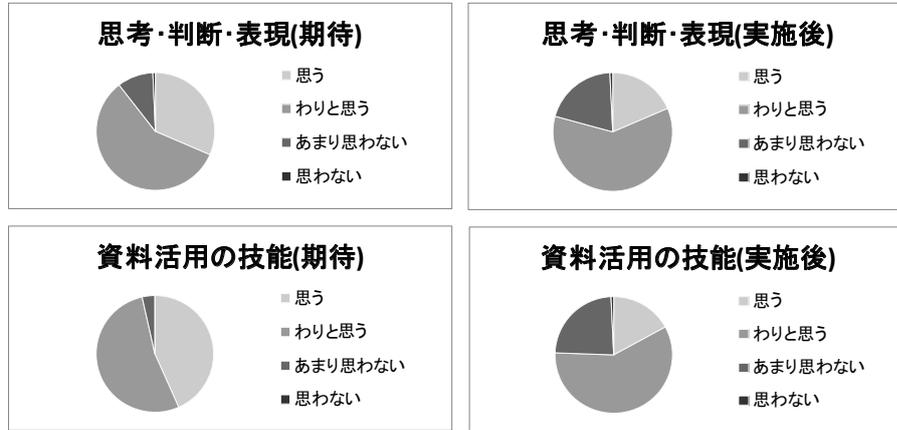
#### ① 授業開始前の期待する気持ちとの比較（地理基礎）

	4月調査（期待する気持ち値）				11月調査（実施後の感想）			
	思考・判断・表現		資料活用の技能		思考・判断・表現		資料活用の技能	
	話し合いなどを行い、物事を深く考えたい	様々な資料を比較したり、読み取ることができるようになりたい	話し合いなどを行い、物事を深く考えることができた	様々な資料を比較したり、読み取ることができた				
4 思う	42	29.4	65	45.5	44	32.6	38	28.1
3 わりと思う	86	60.1	73	51.0	76	56.3	77	57.0
2 あまり思わない	14	9.8	5	3.5	13	9.6	19	14.1
1 思わない	1	0.7	0	0.0	2	1.5	1	0.7
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)



## ② 授業開始前の期待する気持ちとの比較（歴史基礎）

	4月調査（期待する気持ち）				11月調査（実施後の感想）			
	思考・判断・表現		資料活用の技能		思考・判断・表現		資料活用の技能	
	話し合いなどを行い、物事を深く考えたい		様々な資料を比較したり、読み取ることができるようになりたい		話し合いなどを行い、物事を深く考えることができた		様々な資料を比較したり、読み取ることができた	
4 思う	45	31.5	62	43.4	25	18.5	23	17.0
3 わりと思う	83	58.0	76	53.1	82	60.7	79	58.5
2 あまり思わない	14	9.8	5	3.5	27	20.0	32	23.7
1 思わない	1	0.7	0	0.0	1	0.7	1	0.7
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)



地理基礎については、「思考・判断・表現」の項目で4月調査結果を上回った数値を示した。試行期間でありながら、単元構成を、地誌的学習を軸に、系統地理的な知識や見方を活用し、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習を、相互に関連付けて学習する「相互展開学習」とした成果が出た結果となった。ただし、4月当初に期待する気持ちの高かった「資料活用の技能」については、下回った結果となった。資料の読み取りの機会を多く取り、ワークシートを豊富な資料から構成したが、難易度の設定が高すぎた可能性がある。ただし、生徒の自由記述には「毎回授業はすごく楽しいし、自分で資料を読み取って意見にすることをできるようになってきたので良かった。」とあり、部分的には成果がでていいることが分かる。学習の意図が効果的に現れるよう研究を進めたい。

歴史基礎については、「思考・判断・表現」「資料活用の方法」とともに「思う」が大幅に減少し、「あまり思わない」が大幅に増加している。本年度は「世界史A」の一部の授業において上記指導方法を意識的に導入したこともあって、中学校時に協同学習や資料活用に慣れ親しんだ生徒にとってはやや物足りなさを感じた結果と考えられる。この結果を真摯に受け止め、生徒の期待にも応え、これらの技能が着実に身に付くような教材開発と適切な指導方法の研究を一層進める必要性を感じている。

## 3 実施の効果

### (1) 児童・生徒への効果

各調査項目に関して、本年度4月と半年間実施後の11月に生徒対象のアンケート調査を行った。また、研究開発を行う前にあたる前年度末実施のアンケート調査結果を参考となるよう記載した。各調査項目とも4月と11月の2つの時期を比較すると、「地理基礎」において高い数値が得られ「歴史基礎」との差は顕著に表れている。特に、「興味・関心・意欲」の向上、「知識・理解」の深まり、「世界の課題への地域の特色の違いによる思考」などの技能の習得がアンケート調査結果から確認できた。このことは、「地理基礎」において、科目の単元構成をいち早く明確にし、「相互展開学習」を導入した成果と考えられる。

一方、日本史と世界史2科目の融合を図る「歴史基礎」は単元史構成の検討に時間を要し、「歴史基礎」の設定・実施による教育的効果を充分には確認できていない。しかし、身に付いた学習項目として、「世界の課題への地域の特色の違いによる思考」と「世界の歴史的变化」の2項目で数値の増加が認められ、昨年度末での調査結果と比較しても良い結果が得られている。したがって、今年度作成した「単元史学習」構成案に基づいて次年度計画的に「歴史基礎」の内容を実施することで、成果が確認できると確信している。

## (2) 教師への効果

定期的に校内研究委員会を実施し、「地理基礎」及び「歴史基礎」について検討を重ねること自体が、教員としての資質を向上させる良い機会となった。さらに、年齢構成のバランスの取れた地理歴史科の教員団から出た、それぞれの年齢層に応じた建設的な意見の融合を図ることで、様々な学校現場でも実施できる科目の開発につながった。

また、運営指導委員をはじめ、様々な学識者及び現場教員のご意見をいただくことにより構成した「地理基礎」及び「歴史基礎」は、現場の教員だけでは発想できない内容であると同時に、十分に高等学校の現場で実施できるものになっている。

さらに、「地理基礎」、「歴史基礎」を教科内で検討することを通して、2単位という限られた時間の中で“必ず教えるべき内容は何か”、“身に付けさせるべき能力は何か”を常に考えさせられた1年間であった。また、中学校での学習内容との重複を避け、高等学校2年次以降の専門科目への橋渡しとなるような内容を厳選する作業は、これまで必要性を感じながらもできていなかった。特に本校のような中高一貫校においては必要不可欠となる作業であり、実施できたことに大きな意義を有し、個々の教員の研鑽となるとともに、教員間において共通理解を図る良い機会となった。

## (3) 保護者等への効果

本校の保護者は、学校での教育に関心が高く、本研究についても理解していただき、多大なるご協力をいただいた。

具体的には、本研究開発に関する授業の取材・撮影の際は、放課後の実施にもかかわらず、多くのご家庭から、生徒の参加の承諾をいただいた。また、第3回運営指導委員会の際の公開授業の受付や準備などの協力も得られた。

地域の教員をはじめとする多くの方々に授業を見学していただくなど、本校の教育活動に関心を持たれること自体が、本校の保護者の要望と一致するところであり、今後もさらなる協力が期待できると考えている。

V 研究開発実施上の問題点

及び今後の研究開発の方向

## 1 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

### (1) 全体を通して

研究開発全体については、概ね計画的に実施できた。研究開発の内容としては、「地理基礎」及び「歴史基礎」の内容、教育課程上の位置付け及び評価方法等の検討など、次年度以降の教育課程の編成・実施に向けた準備を行った。体制としては、基本的に週1回、校内研究委員会を実施し、研究を重ねるとともに、3回の運営指導委員会を開催し、多くの先生方からの指導・助言を得た。また、拡大研究委員会も4回開催し、神戸大学の教員から貴重な助言を得た。さらに、他校の研究会などに数多く参加し、意見交換等を行うことにより、本研究開発に活かすことができた。

課題としては、「歴史基礎」については、日本史と世界史の融合のための学習内容の精選に多くに時間を費やすことになったため、学習方法の詳細な研究まで進んでいないことが挙げられる。

また、「地理基礎」と「歴史基礎」の関連についての意識的な実践として、地理上の諸課題についての歴史的背景の学習、古地図を活用した歴史学習等を試みた。しかし、昨年度より、地理と歴史の双方を学ぶことの有用性についての生徒評価が低下していることを踏まえると、「地理基礎」及び「歴史基礎」の構造レベルに関わるような改善が必要であると判断している。

次年度以降は、今年度編成した教育課程の実践を通して研究開発を進め、より質を高める。そのためには、学校現場が抱える課題と国における教育課程の改善に向けた検討課題のマッチングを図りながら研究開発を進めていく必要があると考えている。

### (2) 課題解決のための具体的な方策

#### ① 運営指導委員会の実施

運営指導委員会を年3回実施し、指導・助言を受ける。その際、具体的な授業を公開し、授業を通じた指導に加え、「地理基礎」及び「歴史基礎」の目標並びに学習内容等についての助言も受け、さらなる研究の改善に活かす。

#### ② 拡大研究委員会の実施

拡大研究委員会で、神戸大学の教員以外からも指導・助言を受ける。特に、評価についての助言を求める。

#### ③ 校内研究委員会の実施

定期的に、校内研究委員会を実施する。それに加え、「地理基礎部会」、「歴史基礎部会」を行うとともに、「教育課程部会」と「調査検証部会」を開催し、より詳細な研究を進める。

#### ④ 文部科学省、先進校、有識者訪問の実施

文部科学省の教科調査官、先行研究を行っている全国の学校、社会科教育に専門に取り組んでいる教員などを積極的に訪問し、得られた指導・助言等を本研究開発に活かす。

#### ⑤ 「地理基礎」、「歴史基礎」の実施

本校教育課程に「地理基礎」及び「歴史基礎」を位置付け、年間を通して実践する。その際に、本校が目指す「地理基礎」、「歴史基礎」の在り方を、絶えず模索し、日々の授業に活かしていく。さらに、年3回の学習アンケートを実施し、生徒の関心度・理解度について評価する。また、生徒が取り組んだ学習課題・レポート・グループ学習等の学習履歴から、新科目履修により培われた思考力、技能力などについて検証する。

以上を踏まえ、研究開発学校において、今後の教育課程の改善に資するより質の高い研究開発を実施する。

---

文 部 科 学 省 指 定 研 究 開 発 学 校  
研 究 開 発 実 施 報 告 書

平 成 26 年 2 月 発 行

編 著 神 戸 大 学 附 属 中 等 教 育 学 校  
発 行 所 神 戸 大 学 附 属 中 等 教 育 学 校  
〒 658-0063  
神 戸 市 東 灘 区 住 吉 山 手 5-11-1  
TEL078-811-0232  
FAX078-821-1504

---